

頑種ですか。そうですか

匿名既望

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生トラックにはねられ、女神に「ごめん☆」と軽く謝られ、チートを貰い、『ラブプラス』世界の主人公に憑依転生……の、はずだったのに、なぜか『機動戦士ガンダムSEED』のユウナ・ロマ・セイラに憑依転生。お詫びに【超才能】と【超叡智】というチートを貰った主人公は、原作をフルボッコしつつ好き勝手にいくことに――

HDDを整理していたら昔書きなぐったTXT群が見つかったのでなんとなく二次創作だけ投稿してみました。全10話でサクッと終わります。描写皆無のあらすじオンリー展開に注意。あと、ハーレム展開ではありません。なにしろ主人公、最後までぼっちだからな！

目次

第1話	転生ですか。	1
第2話	MSですか。	5
第3話	魔法ですか。	14
第4話	強化ですか。	22
第5話	顛末ですか。	33
第6話	引越ですか。	43
第7話	来客ですか。	51
第8話	開戦ですか。	59
第9話	蹂躪ですか。	72
第10話	終了ですか。	85

第1話 転生ですか。そうですか

>>>CE71.01.25 オーブ連合首長国／主人公

とりあえず落ち着こう。ようやく思い出せた記憶(?)が正しければ、

転生トラックにはねられ、

女神に「ごめん☆」と軽く謝られ、

チートを貰い、

『ラブプラス』世界の主人公に憑依転生……

の、はずだったのに!

「よりにもよってこいつかああああああああああああ!!」

洗面所で鏡を見た俺は、思わず叫び上げていた。

ユウナ・ロマ・セイラン。

種死こと『機動戦士ガンダムSEED DISTINY』の道化役。

種死では父親であるオーブ連合首長国宰相ウナト・ロマ・セイランの片腕として国政にも関わっていたが、とにかく道化のバカとして演出されまくり、バカガリことカガリ・ユラ・アスハの許嫁として最後は踏み台転生者そのものな扱いで死んでいくキャラだ。

そんな男に憑依転生?

おい。

それってつまり。

「頑種ですか。そうですか」

頑種こと『機動戦士ガンダムSEED』の世界……そんな世界に、それも道化のバカに憑依転生? 『ラブプラス』は? 俺の愛花は?

愛花とのデートは? 箱根旅行は? 待て待て待て待てええええ!

ないだろ、これ! 間違いにも程があるだろ!!

……んっ?

何か脳裏に、妙な記憶があるな。ええつと……女神が謝ってる記憶?

——ごめんねー。転生先、間違っちゃった。

——お詫びにチート、もっとあげるお!

——二度目の人生、楽しんでね☆

「楽しめるかああああああああああああ!!」

「ユ、ユウナ!? どうかしたの!?!」

「あつ、母さん……なんでもない。夢見が悪かったただけだから」

慌ててバスルームに駆け込んできた母さんを宥めた俺は、改めて朝のシャワーを浴びることにした。そしてようやく、自分の体が妙に鍛え込まれたものに變化していたことに気がつく。

チートのおかげか? ええつと、確か女神は……

——とりあえず【超才能】だけのはずだったけど、

——お詫びに【超叡智】もあげるから、

——これで勘弁してね、てへぺろ☆

前世の死んだ父ちゃん、母ちゃん。あれ、女神やない、悪魔や。

しかもチートが本当にチートなんですけど?

【超才能】はヒトに為せること全てを努力次第で成し遂げられるようになる能力。努力しなければ意味のないものだが、努力さえすれば先天的特性すら後天的に会得できるという真正正銘のチートだ。

【超叡智】はヒトの知り得る全ての知識を脳内で検索できるというもの。つか、リリカルだったり魔法先生だったりトレースオンだったりする魔法もわかるし、ミノフスキー・イヨネスコ型熱核反応炉はもちろん、宇宙戦艦な波動エンジンとか機動戦艦な相転移炉とかトップを狙う縮退炉とか……あー、でもすぐには無理か。

どんな技術にも前提技術が存在する。自動車一台作るのだって、原材料の採取・加工から始まって、量産するにはマザーマシンから加工機械を……いや、その前にマザーマシンを作るための基準作りも必要か。とにかく、知っていてもすぐ作れるかといえば、そうとも言えないのがモノ造りの難しいところだ。

さらに世界観が違々と法則も違ってくるらしい。どの知識が有用で、どの知識が無駄に終わるか……そのあたりを検証するだけでも面白い気がする。

でも、だからって、どうするよ?!

だいたい頑種って、特に好きな作品でもなかったし、キャラにもこ

声を大にして、この頃の俺に言いたい。
なぜモルゲンレーテに行った！そして、どうしてあんなことをし
でかしたんだ！！

>>>SIDE END

第2話 MSですか。そうですか

>>>CE71.01.25 オノゴロ島@オーブ／エリカ・シモンズ

「そこまで！ もういい！ もういいわッ!!」

私はマイクにしゃがれた声で怒鳴りつけていた。それと同時に、老人よりもなお弱々しい動きを続けていたへM1アストレイへが起立状態へと移行する。

「このセッティングは失敗！ 1時間の休憩！ 技術班も休みなさい!!」

八つ当たり気味にそう叫ぶと、マイクを切り、監視ブースを出ていくことにした。

向かった先は女子トイレだ。

用を足しにきたわけではない。眼鏡を取り、洗面台の冷水を思いっきり出させたうえで、白衣に水が飛び跳ねるのも気にせず、勢いよく顔を洗っただけだ。そのまま洗面台に両手をつき、目の前の鏡を睨み付けた。

……ひどい顔だ。

31歳にしては若い方だと思っていた顔立ちが、今では40代と言われても納得してしまいそうなほど酷い状態になっている。化粧もしていないから目尻の皺もかなり目立った。肌の張りも悪い。目の下の隈は、何か塗ってるのではないかと思えるほど派手に浮かんでさえいる。

「どうすればいいのよ……」

オーブ国防軍用MSの独自開発——当初はザフトのへジンへの残骸を解析するところから始めたものは、研究開始から半年がすぎたところで壁にぶちあたることになった。

操作系だ。

MSの操作系はデュートリオン技術に基づく非接触式神経系出力受信型インターフェイスを利用している。これがあるからこそ、MSはわざわざ人型をしていると言ってもいい。だが、ザフトのMSは

コーディネイターが扱うことを前提としている。

コーディネイター。

遺伝子調整によりナチュラルを遙かに上回る身体能力を備えた者たち。幾多の疾病に対する高い抵抗力すら持ち合わせている彼らは、受精卵段階で受けた遺伝子調整により、容姿も、頭脳も、肉体も、様々な才能も、最初から一流と呼べるだけのものを備えた上で生まれてくる。

そうしたハイスペックな人間が扱うことを前提としたものがザフト製MSの操作系だ。

普通のナチュラルでは扱えないのも当然だろう。

今のところAIに操作処理の一部を任せる形を試しているが、うまくいっていない。一応、モビルアーマー用量子コンピュータ型人工知能も試しているが、やはりこれもうまくいっていない。

なにかが足りない。

やはり元々の入力信号が弱すぎる？ いや、今で限界だ。これ以上はナチュラルに扱えなくなる。だったら増幅の……それも試した。もつと根本的に、設計そのものが間違っている可能性もあるが、そうになるとOSをゼロから作り上げるしかない。

……無理だ。参考になるザフト製OSは、緻密にして無駄がない。

これと同程度の、それもナチュラルでも扱えるOSなど、1、2年で作れるほど甘いものではない。実際、プラントにしてもMSの開発には年単位の時間を要したらしい。きっとそのほとんどは操作系の、OSの開発に費やされたはずだ。

機動人型乗機——通称“MS（モビルスーツ）”。

オリジナルはコーディネイターの始祖、ジョージ・グレンが木星往復船ヘツイオルコフスキーに搭載した船外活動用大型強化外骨格乗機だ。ザフト軍が主力としている「ジン」の根本的な構造は、それと大きく変わっていない。

だが、緩慢な動きしかできなかったジョージ・グレンのMSを、プラントは生身の人間を彷彿とさせるほど素早く、滑らかに動けるように造り替えてしまった。しかし、それを可能とするのは、今のところ

コーディネーターが乗った時だけだ。

ナチュラルには乗りこなせない。

重力圏では立つことも出来ない。

宇宙ではさらに酷いことになる。

「どうすればいいのよ……」

「主任」

不意に女性職員のひとりがトイレに駆け込み、声をかけてきた。

「——!!」

イライラしていた私は、思わず嘔みつかんばかりの勢いで振り返った。

怯える彼女の様子を見て、数秒で頭が冷えていく。

「……ごめんなさい」

「いえ、わかりますから……」

彼女も疲労困憊の様子だ。

そうだろう。

ヘリオポリスでは、大西洋連邦との共同開発である新型MS “GA T-Xシリーズ” が今日明日あたりに完成しているはずなのだ。操作系については向こうもなにひとつ解決していないだろうが、完成させてしまったという点が、私たちの焦りを呼んでいる。

屈辱なのだ。オーブ国民としては。

侵略せず、侵略させず、他国の争いに介入しない——再構築戦争中に建国されたオーブ連合首長国は、この理念を国是とし、理念を共有できる者を国民として迎え入れ続けた移民の国でもある。

私も、その理念に惹かれて結婚間もない頃に移民した口だ。

平和主義だが非武装ではない。孤立主義だからこそ自助努力を忘れない。本島の休火山ハウメア山の地熱による発電を軸に工業化を推し進めてきたオーブ連合首長国は、高い技術力に裏付けられた侮れない経済力と軍事力を背景に、小国ながら、現在の地球圏でも平和を維持し続けている。

そんな国だからこそ、MSを本来の作業機械としたいと願っていた私は、兵器になることも承知したうえで、モルゲンレーテ社でアスト

レイ開発計画に関わり続けてきた。

アストレイ。

「王道ではない」、「邪道な」、「はぐれ者」といった意味を持つ言葉。理念を曲げ、大西洋連邦軍との共同開発から技術を盗用して開発しているMSには、この名が一番相応しいと思い、私が、そう名付けた。

だが、そんな〈アストレイ〉の量産型、〈M1アストレイ〉は、今になっても満足のいく性能を発揮できずにいる。まさか大西洋連邦でさえ、操作系について門外漢だったとは予想外だった。いや、それ以外の技術はいろいろと参考になったが……それでも操作系がダメなままでは使い物にならない。

どうすればいいのか、どうやればいいのか、その糸口すら掴めずにいる……

「主任。外部から、お客様です」

女性職員が申し訳なきように声をかけてきた。

「……また視察？」

「はい……」

これまでも何度となくあったことだ。特にアスハ家のお姫様は、あまりにも何度も通い詰めてきたおかげで開発部の全員と顔見知り……というより友達？ みたいな感じにさえなっている。

私も、あのお姫様らしくないお姫様のことは気に入っている。

オーブ国民としては、もう少しお淑やかになって欲しいと思うところもあるが、ああも純粹で、真っ直ぐで、物怖じを知らないところなどは、いろいろとスレてしまった大人の私には好ましいものに見える。してしまうのだ。

「それで、今度は何処の誰？」

「セイランの……ユウナ様です」

「えっ？ 『哲学者』？」

意外だ。いつも考え事に耽っているかのようにブーツとしていることから『哲学者』と暗にバカにされているセイラン家の御曹司が、わざわざモルゲンレーテ社の視察に来るなんて……それも、私に話が

来たということとは、MS開発を名指しにしてきた？

「断れなかったの？」

「クムト様から直々の御言葉があつたとかで……」

あの老人か……再構築戦争世代にして、ウズミ様も頼りにしてきたという実力者。オーブの食料政策を一手に引き受けている人物でもあり、すでに実権は実子のウナト・ロマ・セイランに譲っているそうだが、そもそも政治家としての器が違いすぎるため今なお、オーブの政財界に大きな影響力を保持している老人のひとりだ。

「あの御老体が……あれでも孫が可愛いのね」

溜息をついていると、女性職員はハンカチで私の顔を拭こうとしてきた。

「平気よ。ありがとう」

自分のハンカチで顔を拭き始める。

「化粧の時間くらい、とれるかしら？ それと掃除の時間も」

「はい、こちらに来られるのは1時間後だそうです」

「そう。だったら開発部にも連絡しておいて。私はシャワーでも浴びてくるわ。あー、それと再開は視察のあと。そう伝えて」

そうだ。シャワーついでに、食事でもとろうかしら？

今日はまだ、何も食べていなかったのだし。

＜＜SIDE END

＜＜CE71.01.25 オノゴロ島@オーブ/ユウナ・ロマ・セイラン

爺様に頼んだら即日OK！ ただ、モルゲンレーテ本社でMS開発していること、なぜ知っているのかと驚かれましたが、秘書をしていけば話くらい耳にする、なんて適当に答えることで誤魔化すことができたっばい。

そんなこんなで、こうして見学に訪れたわけだが。

「これはひどい」

最初はテンションあがりまくりだったが、実際に動いているところ

を見せて貰ったら、そりやもう、ドン引きどころの話ではなかった。だってさ。

MSが下手な太極拳、やってるんだぜ？ いや、ものすごく好意的に見れば、そう見えなくも無いというか……歩いているところなんて、老人が1歩1歩、震えながら必死に歩いているようにしか見えなかったわけ。

「ま、まだ、開発中ですから」

波うつ髪を少し乱雑な感じで短めにしている三十代の女性——開発主任のエリカ・シモンズが、頬を引きつらせながら言い訳を口にしてきた。

「このことは首長会議にも報告済みです。今さら驚かれるほうが意外なのですが」

「見ると聞くとは大違いなもので」

それにしてもこれじゃあなあ……乗ってみたいけど、それ以前の状態か？

「開発データを見ることは？」

「……」

「シモンズ主任？」

「一応、社外秘ということに……」

「ユウナ・ロマ・セイランがお願いしても、無理ということですか？」

「……わかりました」

溜息まじりに、シモンズ主任は承諾してくれた。

権力万歳。

やっぱり、こういうものは使える時に使わないとNE☆

「こちらになります」

「失礼」

監視ブースの椅子に腰掛け、端末に表示される開発データを確認していく。

……なるほど。これはひどい。

〈M1アストレイ〉がまともに動けるようになるのは、原作だとCE71年3月下旬、〈アークエンジェル〉が「オーブ近海に墜落した」と

いうことにして極秘裏に寄港した際、キラ・ヤマトの協力を得た後のことだったはずだ。

今はCE71年1月下旬。

あと2ヶ月……2ヶ月も我慢するのは、ちよつとなあ。

「おわかりにならないと思いますが」

シモンズ主任が俺の背後で解説しようとしてきた。

「MSの操作系はデュートリオン技術に――」

「デュートリオン技術に基づく非接触式神経系出力受信型インターフェイスを軸にしている以上、ナチュラルがこれを扱うにはAIによる補佐が必須なのは、よくわかります。しかしながら、これでは前提となる入力系があまりにも過敏すぎて、処理時間が増える一方です。例えば、この姿勢制御ですが……」

俺はカタカタとキーボードを叩いてみた。

「……こういう感じで、内耳系処理を切り捨てかまわないでしょう。ジャイロだけでも、こっちの処理系を……こうするだけで、数値が全て許容範囲内に収まり、短縮による処理速度の向上が図れます。ただ、このままだと自動処理が強すぎるので……こう……こういう感じ……（カタカタカタカタ）」

「えっ？ 強制中止命令？」

「ええ。キャンセルできるようにしておけば、転倒中でも操作が可能になります。宙域戦用は、こっちをこうしておけば対応可能です」

「……いえ、それではイオンポンプとの兼ね合いが」

「あー、精度の問題か……だったら別に組むか……んくつ」

つい【超叡智】で思いつくままに調整しようとしたが、それだと逆に不具合が生じてしまうわけか。んくつ、いっそ、ゼロから作るか？
「だったら……」

まずは表題をつけて……コメントアウトした仕様を書き込んで……ああ、ここは変数が面倒だな。確か基本は同じだから元からコピペだ。それとこっちは……

>>>SIDE END

>>>CE71. 01. 25 オノゴロ島@オーブ／エリカ・シモンズ

私は……なにが起きているのか、理解できなかった。

「しゅ、主任！ ……これって……」

「しっ！」

思わず私は、声をかけてきた部下に口を閉ざすよう促した。

監視ブースにはキーボードを叩く音が間断なく続いている。その音を響かせているのは暗にバカにする意味で「哲学者」と呼ばれている、あのユウナ・ロマ・セイランだ。

現れた時も、どこか気だるそうにしていた。

〈M1アストレイ〉を見た時には、新しい玩具を目にした子供のような目をしていたが、稼働試験を見学しだすと、再び気だるそうな雰囲気に戻ってしまった。

失望されたのだ。あからさまに。

いつものこととはいえ、相手が「哲学者」だけに、私も部下もイラつかずにはいられなかった。

しかし、どうだ。

社外秘の開発データを五大氏族の一角、セイラン家の直系であることを笠に着て公開させたこの男は、何も知らないどころか、説明しようとした私の言葉を遮り、完璧に理解している素振りで……OSの改良を始めてしまった。

いや、今行っているのは改良ではない。

ゼロから作り上げている。

一部は元のソースコードを用いているが、構造そのものが完全に別物と化していた。その大まかな構造を見れば、今までのOSが人間と機械を直結させたダイレクト・マンⅡマシン・インターフェイスだったのに対し、最初からAIを組み込むことを前提に……そうか！ 最初からAIにも判断させれば良かったのか!?

だが、これを活用するには元になる動作パターンによる弊害が……ああ、だからこそその強制中止命令！ これなら、これなら間違いなく、

一般的なナチュラルの神経系でも充分対応できる!!

「アサギ! システム停止! OS入れ替えるわよ!」

私はマイクに飛びつき、自らも端末の操作を始めた。

「キド、過去のデータから動作パターンを組むわ! 分類しなさい!

イズミ、キース、ジェシー! 彼が完成させたソースから固めなさい!

い! ……ユウナ様!」

「ん〜」

声をかけると、「哲学者」は作業を継続しながら不抜けた声をあげてくる。

「できあがったコードは随時、完成フォルダに入れてください!」

「うーっす」

監視ブースが一気に慌ただしくなる。OSの入れ替えということ
で、試験場の整備員たちも一斉に動き出した。私は強い興奮を覚えな
がら、自らも作業を開始する。

悔っていた。

おそらく誰も気付いていなかったはずだ。

彼は……ユウナ・ロマ・セイランはナチュラルで、有力氏族の子弟
で、役立たずで、それを正面から言うわけにはいかない者たちが「哲
学者」と呼んでいた人間で……

そして、天才だ。

今、私は、天才が初めてその実力を発揮する歴史的瞬間に立ち会っ
ている。

きつと私は、いずれこう言うだろう。

彼の才能が輝きを放つ瞬間を、私はこの目で見たのだ、と。

>>>SIDE END

第3話 魔法ですか。そうですか

>>>CE71.01.25 本島@オーブ/ユウナ・ロマ・セイラ
ン

調子に乗ってへM1アストレイのOSに手を入れてしまったら、何故か黒服に連れて行かれて事情聴取を受けてしまった。どうやら俺の背後にいる誰かさんとやらを知りたいようだが、そんなものいるはずもないので無視を決め込んだ。

と、今度は爺様や父さんが出てきて、

——なぜ今まで黙っていた！

と叱られた。知るかボケ。

今日の今日まで孫を、息子を、グズ扱いしてきたのはどこのどいつだ。

前世思い出す前の俺だって俺なんだ。

文句あるならMS関連の資料を全部俺に寄越せ。いずれ起こる戦いでどうにかなる程度の知識はくれてやるから、あとは勝手に、理念を抱えて溺死しろ。

それより今、問題なのは……

「これ、どういうこと？」

「想像はついてんだろ？」

と言いついてきたのは純白の世界に片膝を立てて座っている純白のヒトガタ。その背後には、隙間無く微細な数式が彫り込まれた上にカバラの「生命の樹(セフィロト)」が浮かび上がるように装飾された象牙製っぽい巨大な扉がそびえ立っていた。

うん。どう考えても『鋼の錬金術師』の「真理の扉」だ。

俺、空いている時間をつかって【超叡智】で引き出せる魔法について考えていただけのつもりなんだが……

「まさか、魔法的な真理を探求しようとしたから、【超叡智】そのものが概念としてこういう状況を生み出した？」

「お前がそう思うんなら、そうなんじゃないか？」

ですよねー。答えなんて、誰にもわかんねーって。

「まあ、いいや。帰ろうと思えば帰れるんだよな?」

「やってみればいいだろ」

じゃ、帰ろう。——うん、部屋で椅子に座ってるな。しかも時間経過はほぼゼロ。

よし、行こう。——うん、また真理の間だ。

「ただいま」

「おかえり」

さて、こうなると魔法について慎重に考えたほうがいいな。

いや、相談してみるか。

「ところで——」

その場であぐらをかきながら真理……いや、【超叡智】か? そいつに問いを投げかけてみると、意外なほど素直にいろいろなことを教えてくれた。

「おまえが認識している形で話を整理するなら、まず、魔法に限らず物理法則を逸脱した何かを為すには、世界に新しい法則を刻み込む必要がある」

「魔術基盤か」

「型月系の概念だな」

魔術基盤とは世界に刻まれた神秘法則のことだ。

元ネタの型月系世界では学問や宗教といった形をとりつつ、聖地等と呼ばれる場所を起点とした地脈等に溶け込ませた上で、個々人が持つ魔術回路を接続することで初めて神秘が為される、と解釈されている。

無論例外もあり、口伝や血統などの場合は地脈のバックアップが不要になるそうだ。同様に、特殊な魔術回路のみで神秘を為す、異能者も存在するらしい。たとえば剣の属性を持つ錬鉄の英雄のような。

こうした考えは、この世界でも使えるようだ。

流派東方不敗やニュータイプ的感觉は地球という惑星そのものを聖地とすることで魔術基盤を形成している。ガンダムのシリーズ作品ごとにニュータイプに該当する能力が違っていたのは、どうやら魔術基盤の変異によって起きていたようだ。

はてさて。

それらを踏まえた上で考えてみよう。

他の作品世界の神秘技術は使えないのか？

答えは「使える」だ。

実はすでに【超叡智】そのものが必要最低限の魔術基盤として機能している。ただし、このままでは自己の内面に作用する神秘しか扱えない。本格的に何かをしたいなら、外界における基盤の基礎を作り、その上で別途、魔術基盤を組み上げる必要があるそうだ。

「あとは、わかるな？」

真理がニヤニヤと告げてきた。

「死ぬ気で魔術回路を作ればいいってことか」

魔術回路とは魔術師が体内に持つ擬似神経、幽体と物質を繋げる為の回路、魔力を精製する道具、マナを汲み上げて人間に使えるモノにする変換機、システムを動かすためのパイプラインのことだ。また、生命力を魔力に変換するための路（みち）であり、魔術基盤という大魔術式につながる路（パス）でもある。

すなわち、【超叡智】を元にして魔術回路を作り、魔術回路をベースに確固たる魔術基盤を別に作り上げないと、本格的に魔法は使えないってことだ。

「んっ？ つてことは、オドとマナの違いはすでにあるってこと？」

「内在と外在の違いか」

「ちなみに聞くけど、先天的魔術回路って、もしかしてリンカーコア？」

「おまえがそう考えるんなら、そうなんだろうな」
なるほど。そういう使い方もできるってことか。

「仮に新しい魔術基盤を作り上げるとしたら、どういう方法がある？」

「一番簡単なのは魔導書だろ」

「へえ……」

「魔導書はどの世界でも一般的かつ使用者を限定しやすい魔術基盤として利用されてる」

「作り方は？」

「知ってるだろ？」

……ああ、なるほど。言われて「わかった」。【超叡智】様々だ。

「じゃ、いろいろ試してみるわ」

「なんだ。扉（こいつ）の向こう側にいかないのか？」

【超叡智】「だけでおなかいっぱい」

「そりやまた贅沢な話だな」

そんなこんなで真理の間から戻ってきた俺は、時間が本当に一切経過していないことを確かめ「やっぱ魔法ってすげー！」とかテンションをあげつつ、自分だけの魔導書造りを始めることにした。

方法は至って単純。【超叡智】から引つ張り出した神秘知識を再構成したものを新品の手帳に、自分の血をインクに混ぜたガラスペンでカリカリと気合いを入れながら書いていくというだけの話だ。

求めたのは『魔法先生ネギま！』の電子精霊。

基本を無視して応用を求めるなんて無茶も良いところだが、【超才能】でゴリ押しできる俺にとっては大きな問題にならない。実際、翌日には魔導書が完成した。

「おーし。こんなもんか……」

完成したところで、かなりドキドキものだが気合いと根性で魔術回路の生成に挑む。

「……くっ」

呪文は使わなかった。ただイメージは、こめかみに銃口を押し当てた拳銃の引き金を絞るといふものを使わせてもらった。ペるそなー。これによって幸いにも108本もの魔術回路が俺の中に生まれてくれた。

つて、多すぎ！『Fate』の遠坂凜でも40本だったのに……あー、でも『月姫』のカレーさん、もといシエル先生は3桁だったな。俺もギリギリで3桁だけど、シエル先生はもつとあるんだろうな……「それよりも魔法だ、魔法」

早速、電子精霊の召喚・制御の呪文を唱える。起動詞は自然と思いつかん。

「アブラーカダブラ……」

なんという安直で短い起動詞。手抜きにもほどがある。だが、これで使えるのだから仕方がない。ついでに、中二病的な「ぼくのかんがえたかつこいーじゅもん」を唱えずに済んだので安心したやら、少し残念やら……

いずれにせよ、こうして俺は電子精霊召喚術を出発点とし、神秘の世界にも土足で乗り込んでいくことになるのだった。

>>>SIDE END

>>>CE71.01.27 オーブ／OTHER

「重ねて尋ねさせていただく！ ヘリオポリスという領土がプラントの侵略を受けた今、なぜ決断を下せないのか！ 報復せずとも、謝罪と賠償を求めるのが筋ではないのか！ それをせずしてなにが理念だ!!」

断固たる声がオーブ首長会議の場に響き渡った。

勢い込んでいるのは財務相クムト・ミラ・セイラン。五大氏族のひとつ、セイラン家の現首長にして「オーブの獅子」ウズミ・ナラ・アスハの影に隠されてこそいるが、オーブでは屈指の影響力を持つ政財界の巨人でもある。

そんな老人が勢い込んでいる。孫の存在が、彼をそうさせているのだ。

「哲学者」ユウナ・ロマ・セイラン。彼が、紙一重の天才だったことが明らかになったのはわずか2日前のこと。当初はなぜ黙っていたのかと息子ウナト・エマ・セイランと共に孫をなじったものだが、生まれて初めてブチ切れたユウナが、

「今日の今日まで孫を、息子を、グズ扱いしてきたのはどこのどいつだ。」

——文句あるならMS関連の資料、全部俺に寄越せ。

——いずれ起こる戦いでどうにかなる程度の知識はくれてやる。

——あとは勝手に、理念を抱えて溺死しろ！

——言い放ったことで老人の魂に灯がともってしまった。

再構築戦争後、独立と自立のために奮闘していた父親の後ろ姿。二代目として悪縁が断ち切れない東アジア共和国のありとあらゆる攻め手にあがないながら、必死になって国内経済のために奮闘した日々。そしてマスドライバー“カグヤ”と資源コロニー“ヘリオポリス”によつてオーブの立場が確立し、あとは後の世代に託そうと一歩退くことを決めてからの穏やかだが何か物足りない日々……

それまでの人生を走馬燈のように思い出した老人は、孫を見誤つていた後ろめたさも手伝い、かつての姿、すなわち“エコノミック・ドラゴン経済の竜”たる荒々しい魂を取り戻すに至つたのだ。

だからこそクムトは憤（いきどお）つた。

ヘリオポリス崩壊事件。原作において、オーブはこれに関する政治的な対応を行つた形跡がない。オーブの理念に照らせば、領土たるヘリオポリスを破壊されたのだから、プラントに強い抗議や実力行使を行つてしかるべきだというのに、なんらそれらしい行動を見せなかつたのだ。

さもありあん。

この世界では特にそうだが、オーブは今、ウズミの中立宣言によつて自縄自縛の状態にある。モルゲンレーテ社と大西洋連邦軍の次世代機動兵器共同開発事業、通称“G計画”は、国内的には辞任した前機械相の独断専行という形になつているものの、理念を自ら破つたと認識している部分が少なからず存在している。

そこに來てのヘリオポリス崩壊。理念を破つた上で攻められたのだから自業自得だ。そんな考えが脳裏をよぎらないオーブ国民はひとりとしていない。

さらに、仮にその件がなかったとしても、ウズミの中立宣言は、今次大戦中にどちらか一方の勢力に攻められた際、オーブがどのように対応するべきかという選択肢そのものを狭める要素をはらんでいた。

単純な話だ。

理念では、他者の争いに関わらないことを良しとしている。だが仮に、今回の件でプラントと敵対した場合、それは地球連合とプラントの争いに自ら関わってしまう形になる。仮に地球連合に加盟しない

場合であっても、敵の敵は味方だ。オーブはその時点から、事実上、地球連合側としてプラントと戦うことになってしまっ……

それは中立宣言に反するのでは？

理念を否定するのでは？

そんなことを言われてしまえば、黙り込むしかないのが今のオーブだ。

だからこそ、この世界のオーブは原作と同じように、ヘリオポリスの惨劇が判明しても「本土の守りを固める」以上の対応ができなかった。

これをセイラン家首長クムトは真正面から否定したのだ。

すなわち、侵略者には必ず報復するのがオーブの理念である、と。

宣戦布告するべきだと。

実際に軍を動かすべきだと。

それがダメなら謝罪と賠償を強くプラントに要求するべきだと。

G計画？ それがどうした。

必要なら全て情報公開すればいい。間違っているのなら、それは何らかの形で正せばいい。責任者の辞任程度で済ませられることではない。そんな甘い考えで再構築戦争を乗り越えられたのか？ 戦後の混乱期はどうだ？ そもそもウズミが「オーブの獅子」と称えられた理由は、大国に対しても屹然とした態度を示し続けたからではないのか？

「それなのに今度ばかりは沈黙を守るとはどういうつもりだ、ウズミ・ナラ・アスハ！」

無役となつたはずなのに、「アスハ家首長顧問」などという名目で首長会議に参加しているウズミを睨み付けたクムトは、さらに激しく、言葉を重ねた。

「ヘリオポリスはオーブの領土ではないとでも言うつもりか!？」

本土でなければ侵略されても黙っていると言うつもりか!？」

重ねて尋ねる！

オーブの理念はなんだ！

侵略せず、侵略を許さず、他国の争いに関わらない——違うか!？」

我らは侵略されたのだ!

もうすでに連合とプラントの戦いは他国の争いではない! 我々の争いだ!!

それなのに! それなのになぜ、プラントに対抗しない!!」

ウズミは何も言わない。いや、もともと代表首長の座を弟に譲っている上に大臣職にも付いていない彼には、本来、この会議で発言する資格がない。アスハ家の首長座すらも弟に移譲している。

ゆえに今のウズミが黙り込んでいるのは、当然の結果だ。

だがこうなるまで、ウズミは常に首長会議で発言を繰り返してきた。原作においては、まるで代表首長の座を継続しているかのような位置づけで、当たり前のように許可すらなく発言を繰り返し、あまつさえ、その決断が容認されていたわけだが……

「黙り込むならこの場から去れ!

さあ、ホムラ代表首長。

アスハ家首長としてお答えいただきたい。アスハ家はオーブの理念を否定し、侵略されても黙り込むのか。それともアスハ家はオーブの理念を尊重し、侵略を許されないものとして行動するのか。どちらを選ばれるのか! さあ、お答えください!!」

こうしたクムトの燃え上がる魂が、オーブの未来を原作から大きく逸脱させていくことへとつながっていくのだった。

>>SIDE END

第4話 強化ですか。そうですか

>>>CE71.03.23 本島@オーブ/ユウナ・ロマ・セイラ
ン

「原作ブレイクとか、そういう問題じゃないよな。こりやもう……」

TV映像の中では海上を滑るように進む白い軍艦と、その周辺を飛んだり甲板に降り立っているオーブ本土防衛軍の新型機動兵器の勇姿が映しだされていた。

うん。俺、ついやっちゃんだ☆

しかもいろいろやらかしたせいで原作を完全にブレイク。今日は原作だと、オーブ近海に到達した〈アークエンジェル〉がザラ隊の追撃を受けつつ、さらにはオーブ軍からも攻められて墜落を装いつつ領海に侵入、オノゴロ島に入港した、という展開が起きるべきタイミングなのだが……

ザラ隊が本国に戻されており、

オーブ軍の国産MSが空を飛び回りつつ、

〈アークエンジェル〉を拿捕している。

ホント、原作なんて斜め上にすっとなんでいる状況だ。

すべてはヘリオポリスが崩壊し、俺が覚醒(?)した1月25日までさかのぼる。

オーブ連合首長国の最高意志決定機関である首長会議は、ヘリオポリス崩壊という事態において、当初はなにひとつまともな対応がうてなかった。

前機械相の独断によるモルゲンレーテ社の大西洋連邦軍MS共同開発計画への参加、いわゆる「G事件」が昨年末に発覚、カリスマ的指導者だったウズミ・ナラ・アスハが監督責任をとるとして首長代表の座を辞任し、オーブ政府はG計画からの正式な撤退に向けて大西洋連邦との調整を始め……と報道されていた中での事件だったせいもある。

撤退するはずだったG計画の成果が実はすでに完成していたとか、ヘリオポリスというオーブ領土がZAFFTに襲われたとか、

でもアスハ一門の一部が密かに大西洋連邦軍艦艇の寄港を認めていたとか、

G計画の契約違反にあたるオーブ製試作MSが残されていたとか、問題の一部氏族が証拠隠滅のため傭兵を雇い、

雇ったことすら揉み消そうと別の傭兵を雇って襲わせたとか、

でも発覚して追求されれているとか、

それらもあつて対外的に理念を理由に正論が言えなくなったとか

……

考えてみるとオーブの理念重視つて、もうすでに破綻している。それなのに原作で“理念のために国土を戦火に曝す”決断をしたあたり、原作の首長会議は自己満足のために国と民を犠牲にしたと言われても仕方がない。まあ、おそらくそこには当事者にならないとわからないアレコレがあつたのかもしれないが。

だが、この世界では事情が違う。

おそらく俺に関係しているのだろうが、爺様ことクムト・ミラ・セイランが気炎を張り上げ、責任を感じて黙り込んだウズミヤ、何も決められない他の首長たちの尻を蹴り上げた。これによって、事態が大きく動いてしまったというわけだ。

なお、それまでの爺様は隠居同然の存在で、今期を最後に父さんに首長座を含む跡目を全て譲ることを宣言していた。おそらく原作では、それもあつて気迫に欠け、あれよあれよという内にオーブ解放作戦当日を迎えてしまったのだと思う。

しかし、気合いの入った爺様は全くの別人だった。

幼かったとはいえ、再構築戦争と建国当時を経験しているのは伊達ではない。

——理念を尊ぶならば徹底して貫け！

——侵略を許さぬというなら、侵略された今、なにをするべきは自明の理だ！

爺様のその叫びに、諸氏族の老人たちが喝采をあげた。

さもありません。

種死のオーブ軍を見ればわかる通り、オーブにはもともと武断的な

気風がある。氏族に行政のみならず軍事においても多大な権限が与えられているところも、そうした側面があるからこそだ。

斯くしてヘリオポリス崩壊から3日後の1月28日、オーブ首長会議は全会一致でヘリオポリスを侵略したプラントに対して謝罪と賠償を求める強い抗議を行った。

決定的な原作剥離の始まりだ。

プラントはこれを見做すも、オーブは地球連合に与しないことを宣言しつつ、昨年のエイプリル Fool・クライシスでオーブ領海にも降下物があったことと合わせ、

——極めて遺憾ではあるが、プラントが我が国に宣戦布告し、戦争状態に入ったことを正式に認めざるをえなくなった。

と発表してしまう。

世に言う『ウズミ代表の戦争宣言』だ。

そう。ウズミ代表だ。

同会見は、ウズミの代表首長再就任を発表するものでもあったというわけだ。

爺様と父さんから聞いた話によると、強いリーダーシップが必要となったため、途中までは爺様が代表首長になる流れになっていたものの、オーブの王族にも等しいアスハを推す声が予想以上に根強く、かといって文官肌のホムラでは爺様の対抗馬になりえないことから、ならばウズミの再登板を、という斜め上の展開になったんだとか。

無論、容易く決まった話ではない。

ウズミの再就任にあたり、アスハ家は莫大な私財をオーブに供出。これはヘリオポリスの被災者保護と施設復旧に費やされるばかりか、急ぐ必要がある国防体制の拡充にも割り当てられ、さらには数々の權益をセイラン家に譲ることで譲歩を勝ち取ったようだ。

まっ、俺にはどうでもいい話なので細かいことは聞いていないが。

いずれにせよ、表向きに、ホムラ代表首長はヘリオポリス崩壊のストレスで退場、本当の意味で責任を果たすべくウズミが代表首長の座に返り咲き、対応に必要な資金の全てをアスハ家が私財から出すと表明した。ということになっている。

ウズミのカリスマ性は健在だったため国内の反発は少なかった。国外は、もともと地球連合に加盟した東アジア共和国が、

——南米のように赤道連合もオーブも断罪すべし！

とか叫び続けていたので最初から「ふーん」に近い対応を受けている。

閑話休題。

ウズミ再任により戦時体制下に入ったオーブは、そこから矢継ぎ早にいろいろなことを始めた。というか、それを可能とするだけの予算がアスハ家から供出され、必要な技術を俺が大盤振る舞いした結果、すごく楽しいことになってしまった。

まずMS関連。〈アストレイ〉は装甲等を削り、運動性を追求するコンセプトで設計されたMSだが、現状ではあまりにも脆すぎるし、なにより空も飛べなければ海にも潜れない。島嶼（とうしょ）国家であるオーブでは使えないにもほどがある仕様だ。

そこで俺は、機械相に就任した父さんが求めるがまま、いろいろとやることにした。

装甲は『新機動戦記ガンダムW』のチタニウム合金を採用。生産性も性能も総重量も現行の発泡金属より遙かに上であり、かつ発泡金属が微小重力環境下でしか精錬できない一方、こちらは地上工場でも精錬できたことが採用の理由だ。

ついでに〈アストレイ〉の生産性・性能・整備性をさらに突き詰めると、

全高16.9メートル、重量8.0トンに収まってしまった

本来の〈M1アストレイ〉は全高17.53メートル、重量53.5トン。

〈105ダガー〉が全高18.00メートル、重量57.05トン。

〈ジン〉に至っては全高21.43メートル、重量78.5トンなのに、だ。

恐るべしチタニウム合金。というか『W』の素材工学がチートなだけか。
んで。

種死時代はへムラサメ〓生産分に割かれていたジェットエンジン系の生産ラインが空いていたので――原作でフライトローター〓シユライク〓が使われたのはその関係？――おもいきって種死のへウインダム〓に採用されていたジェットストライカーを設計、超軽量化が実現していることもあり、へアストレイ〓は生まれながらにして空戦機としてもバツグンの性能を得るに至った。

水中用は、将来的にMS技術を応用した水中戦用MAを独自開発するべきとした上で、電磁推進式のマリンストライカーパックと幾つかの水中用装備をへアストレイ〓に装備する形で対応する方式を提案。いわゆるへブルーフレーム〓のへスケイルシステム〓の方針ってやつだ。

オマケとして『ソードアート・オンライン』のVR技術を若干応用し、とでもリアルなシミュレーターの仕様と基本プログラムを作成。これのアーケードゲーム版をセイラン家の系列企業で製造販売することも父さんに提案しておいた。

これらは全て、2月7日に父さんに諸データを提出する形で丸投げさせてもらった。

それというのも。

電子精霊を使役できるようになった俺はオーブ全土の中小企業に偽装した上でパーツを発注しまくり、古代アルハザード式魔導術のデバイスを兼ねた『アクセル・ワールド』のニューロリンカーっぽいものを2月6日の時点で完成させていたのだ。

で、ダイレクトリンクで「マルチタスク」をフル活用したら、1日で必要な作業が終わってしまった。という感じだ。

なににせよ。

俺の提案にオーブ政府は大興奮、モルゲンレーテ社は大混乱だったらしい。

笑えたのは、父さんが卒無く全技術をパテント化、新たに起業した俺の持ち株率100%の個人企業〓フロンティア〓に権利等を一括した点だろう。おかげで俺は一夜にして途方もない大金持ちになり、さらには爺様と父さんが〓俺の承認が無いと他国に技術供与できな

い”という点を使って外交攻勢にも討って出たわけで……孫息子を出汗につかうとは、ほんと、セイランの血筋は鬼やでー。

とまあ、そんな感じで。

俺によつて魔改造されたオーブの機動兵器は、俺が既存の生産設備も考慮した上で諸々を再設計したおかげもあって、なんと2月15日の段階で試作機が完成してしまい、その性能に誰もが驚きの声をあげる結果となった。

こちらからの提案もあり、正式採用された「アストレイ」の名前は微妙に変わった。

〈MBF-M1 アストレイ〉。

“ASTRAY+α”なので「アストレイア (ASTRAYA)」。実に安直である。

原作でいう低軌道会戦が起こり、地球連合の宇宙戦力が大幅に削がれる結果となった翌々日にあたる2月15日、試作機が満点の出来映えであることに喜んだ首長会議は、正式に世界初のナチュラル用MSにしてMS国産機第一号となる「アストレイア」を国内外に広く発表した。

このあたりで外交環境も変わりだした。

とはいえ、ヘリオポリス被災者の本土受け入れと共に脱出艇の記録装置が持ち込まれたことで「崩壊に「アークエンジェル」やGAT-Xシリーズも関係」していた事実が明らかになっていった点も大きく関与している。

原作でも「アストライク」の「アグニ」、「アークエンジェル」の「コロニー」内部への兵器使用が崩壊の一因となったのは否定できない。さらに地球連合軍の「メビウス・ゼロ」が応戦していた映像が手に入ったことで、オーブは、というか爺様はかなり強気になった。

なんでも「アスパー」門、というか「サハク」家は、裏で「アークエンジェル」と「GAT-X」シリーズの引き渡しには応じていたものの、ヘリオポリスへの地球連合軍艦艇の接近および寄港そのものは正式に認めておらず、あくまで不正規行動だったらしい。

それを破った上に、あまつさえ「コロニー」崩壊に関与している。

どう落とし前をつけるつもりだ。

と、爺様は大西洋連邦に強く詰め寄った。

以前の大西洋連邦なら、これを一蹴しただろう。なにしろ公式に認めていないとはいえ、アスハ一門が許可を出していたのだ。ウズミが知らなくとも一族が関与している以上、知るかボケ、と返すこともできる。

だがそうもできなくなる理由が生まれてしまった。

1月25日、俺が【超叡智】で〈アストレイ〉用OSを完成させてしまい、

2月15日、ナチュラル用量産型MS〈アストレイア〉がお披露目されてしまった。

ちなみにロンド姉弟がこれを手みやげに何かやらかすことが予想できたので、俺が早々に二人をマーク、ダミー情報をばらまきまくり、NOS（ノス）と呼ばれたしたナチュラル用OSの情報が漏れないようにしておいた。電子精霊様々である。

結果、大西洋連邦は「知らないふりをする」という選択肢を選んできた。

——G計画？ 末端が勝手にやったことです。知りませんなー。

——〈アークエンジェル〉？ ヘリオポリスで作ったオーブの船でしよ？

——〈GAT-X〉シリーズ？ ヘリオポリスで（以下略

——我々の責任？ 知りませんなー。

——ところでオタクのOSなんてけど……………
とまあ、こんな感じだ。

少なくとも大西洋連邦は〈アークエンジェル〉の船籍を過去に遡って抹消。第八艦隊から送られてきた搭乗員についても、なんと軍からの逃亡者として軍籍を抹消。徹底的に無関係であると主張してきた。厚顔無恥、ここに極まれり。だがブルーコスモス盟主が我が者顔で暴れられるような組織でもある。さもありませんと納得できるあたりが頑種世界の頑種世界たる由縁だ……………

いずれにせよ。

斯くしてNOSが欲しい大西洋連邦と、謝罪と賠償が欲しいオーブとの外交折衝は原作をいろいろと破壊しながら、事実上、ヘークエンジェルとGAT-Xシリーズの所有権譲渡と諸技術の正式な無償交換という形で3月10日にまとまってしまった。

NOSの件は今後の相談次第って感じだ。

なお、これとは別にユーラシア連邦もNOS獲得競争に名乗りをあげている。対価は、ZAFに一時占拠された後に放棄された小惑星基地アルテミスの所有権譲渡とユーラシア連邦の得意技術である光波防御帯シールド「アルミューレ・リュミエール（AL）」の技術供与というもの。

爺様に聞いたところ、AL技術は秘匿技術なので国際パテントが無いらしい。だから種死時代にZAFが好き勝手に応用してたわけか——と納得しつつ、だったら知ってるからいらね、と答えておいたら、さらにユーラシア連邦からいろいろとむしり取る算段をたてはじめた。おお恐い恐い。

そんなこんなでいろいろとありつつ原作通り、地上に降下したヘークエンジェルがオーブ近海へと姿を現したわけだが、すでに触れている通り、ZAFの追撃は受けていない。

それは何故か。

いやあ、電子精霊で情報を集めつつ各方面に嫌がらせをしたら、いろいろと凄いことになっちゃって。

そうそう。魔法といえば。

まずは内憂。サハク家の背信を徹底的に暴き、それに連なるモルゲンレーテ社とアスハ派の馬鹿どもも吊し上げてある。その結果、サハク姉弟とその親派はヘアストレイ「ゴールドフレーム」を積んだオーブ宇宙軍所有のコネリアス級輸送船2隻で逃走。国際指名手配を受けることになってしまった。

ちなみにアストレイ開発チームは無罪だったので残留。今はヘアストレイの量産化が完了したので、仮称「マリリン・アストレイ」開発のために水圧・水流との飽くなき戦いを繰り広げている。がんばれ。超がんばれ。

続いて多国籍企業複合体である秘密結社“ロゴス”と、それすらも手玉にとっていた“一族”と呼ばれる調整者気取りの連中。内部不和があったので煽りまくり、秘匿されていた施設等の自爆装置を問答無用で全て起動。2月14日のバレンタインデー、世界中の様々な施設で一斉爆破テロが起こったばかりか、時間遅れで3月1日には火星植民都市も吹き飛び、『ASTRAY』を含む『ASTRAY』シリーズが強制終了状態になった。

おまけにロゴスも一族残党も内ゲバを開始。

さすがにこれには俺もビビった。

鬱る部分もあった。

だが、反省はしても後悔はない。

ロゴスも一族も、オーブに不利益を与える組織だ。これに対抗した結果なのだから、これに巻き込まれた無関係者の犠牲者には一生、冥福を祈り続けようと心に決めている。

さて。

マティスを失った一族は空中分解。そのあたりは原作と同じだが、俺がさらに煽ったせいで残党の内ゲバが激化の一途をたどり、それが今も続いている。

ロゴスは半数が互いに暗殺され、さらに紆余曲折あった末に、大西洋連邦系のムルタ・アズラエル、ユーラシア連邦系のロード・ジブリー、東アジア共和国系のイワオ・ワシズの三巨頭が手を結んだことで一応の和解にこぎ着けている。

こうした一族とロゴスの混乱によって、世界は表も裏も大騒ぎだ。表ではハイパー化一步手前のインフレが発生。ロゴス系資金があまり入っていないなかった中立国のオーブ連合首長国、赤道連合、スカンジナビア王国とプラント側の大洋州連合はそうでもなかったが、地球連合加盟国はかなりの経済的打撃を被ることになった。

裏では疑心暗鬼から大小様々な組織の潰し合いが横行。ただ、一族がやっていたスクール等の未成年や、ロゴス系のブーステッドマンやエクステンデッドといった強化人間には俺の方から介入し、NGO団体等に保護させている。もつとも、すでに治療の余地が無い被験者も

少なくなかったが……

こうなるとプラントが高笑いをしていそうだが、そうは問屋が卸さない。

電子精霊網が広がった時点で、俺はプラント評議会が情報統制により隠していた“Z A F Tのナチュラルに対する蛮行の数々”を暴露した。評議会は地球連合の情報攻勢だとしきりに主張したが、そんな公式会見の映像すらもジャックして、アフリカ戦線における現地Z A F T部隊の蛮行——後にこれはアフリカ事件と呼ばれた——を流し、コケにした。

そしてとどめにラウ・ル・クルーゼに関する暴露も行った、という次第だ。

結果的にプラントの市民感情はまともを見せず、こちらもちちらで戦争どころではない状況に陥っている。

つまり本当の一人勝ちはオーブ——というわけでもない。

地味にオーブは国際的に孤立している。ウズミ代表の中立宣言はエイプリルフル・クライシスで被害を受けた諸外国への援助すら行わない、事実上の引き籠もり宣言だ。当然、被害を受けた国々は、地熱発電でぬくぬくしてるオーブを妬むことになる。

結果が中立ではなく孤立。

だがアスハ派に飼い慣らされているオーブのマスメディアは、そんな現実を“報道しない自由”によって隠している。原作第一話でキラたちが今次大戦を遠くの出来事と認識していた理由は、ここにあったようだ。

ゆえに俺は、そのあたりを暴露しまくる形でオーブもまた混乱させることにした。

アリバイ工作、とも言う。

一連の暴露は、ジョン・ドウというフリージャーナリストにして天才ハッカーが行った反戦・平和運動の一環、という形にした。だから念のため、俺自身のことも暴露し、俺が最初からオーブのMS開発に関わっていればヘリオポリスの悲劇そのものがなかった、みたいに詰る報道も行っている。

これら一連の大暴露劇は後に「ジョン・ドウ暴露事件」として歴史の教科書にも載ってしまうのだが、おかげで俺の電子精霊網は以後も俺だけの武器として大暴れしてくれることになるのだった。

って、そうそう。クルーゼの査問会、どうなったんだ？

へいくら否定しようが、ここにがあるだろう！ コーデイナーを自称する貴様らとて、ホモ・サピエンスに他ならない！ ならば、いざれ私を！ この私のような絶望を！ 滅びを望む意志を生み出すだけだ！

あつ、キレてる。

面白いからあとで全部、世界中に放送してしまおう。ジョン・ドウの最後のお仕事ってことにすれば、なんとかなるんじゃないか？

>>>SIDE END

>>>CE71.03.24 OTHER

後世、その査問会の映像は「ラウ・ル・クルーゼの絶望宣言」とも呼ばれることになる。

またラウ・ル・クルーゼ本人は査問会の後、軍法会議により極刑に処されている。

記録に残る最後の言葉は、

——私を消しても何も変わらないぞ、人間！

やはり絶望の慟哭そのものだった……………

>>>SIDE END

第5話 顛末ですか。そうですか

>>>CE71.03.28 本島@オーブ/ユウナ・ロマ・セイラ
ン

3月28日の夕刻。へアークエンジン<のオーブ到着から5日後、原作ではモルゲンレーテ社に協力するキラ・ヤマトと、ザラ隊を率いてオーブの潜入したアスラン・ザラが金網越しの再開を果たす時系列なのだが、この世界では諸々の前提条件がすでに根本から覆されている。

ラウ・ル・クルーゼの失脚によりザラ隊は本国に召還されているのだ。

処罰のためではない。

4月1日に予定されているプラント評議会議長選挙。そこで強硬派の首魁、パトリック・ザラが当選するためには、ラウ・ル・クルーゼに代わるZAFTのエースが必要だった。また、穏健派にも考慮する形で綱紀粛正に乗り出す必要性があった。

そのためにアスラン・ザラが必要となったのだ。

プラントの精神的支柱になりつつあるラクス・クラインの婚約者であり、さらにはクルーゼに準じる若手のホープとされたアスランを英雄に祭り上げることで、ZAFTの建て直しを計ろうとしたわけだが……

これにより、すでにアスラン・ザラとイザーク・ジュールのFAITH昇進が内定済みらしい。またニコル・アマルティはアスランの、ディアッカ・エルスマンはイザークの副官となることも決まっていた。

さらにさらに核動力機のうちへフリーダム<の開発を中止することで生産を急がせたへジャステイス<2機と専用運用艦、エターナル級高速戦闘母艦一番艦へエターナル<がザラ隊に配備。ナスカ級高速戦艦へヴェサリウス<を旗艦とする旧クルーゼ隊はイザーク隊として再編成してへイージス<とへブリッツ<もこちらに配備。いずれも「オペレーション・スピットブレイク」での活躍が期待される形になって

いる……

そのためザラ隊は、原作で言うマラツカ海峡突破戦の前に本国へと戻っている。アスランとカガリの無人島イベントも起きなかったところは不幸中の幸いなのか、不幸なすれ違いの始まりなのか。

また、この関係から3月23日に起きた（アークエンジェル）のオーブ入りは、偽装の必要もなく、すんなりとオノゴロ島に招き入れる形になり、かつそこでアークエンジェル組には脱走兵扱いされているという衝撃の事実が突きつけられることにもなっている。

その際の乗組員たちの衝撃のほどは、察するにあまりあるところだ。

と云うかカガリ・ユラ・アスハが即座に爆発した。

——— どういうことだ！ 彼らは、彼らは……必死になって戦ってきたんだぞ!!

だからどうした。オーブに言われても困る。

閑話休題。

紆余曲折の末、オーブ政府はアークエンジェル組の処遇について、志願兵扱いだったオーブ市民の少年少女たちは保護という扱いで無罪放免に、元地球連合軍人たちは亡命するなら一定の配慮を、拒否するなら本国に送還、という方向性を定めることにする。

サイ・アーガイル、トール・ケーニヒ、ミリアリア・ハウ、カズイ・バスカークは家族の下に帰り、後に全員が本島の教育機関に復学。サイは政治の道を志し、トールはなおも軍属との天秤で揺れ、ミリアリアはそんなトールを見守り、カズイはこれという未来を定めないまま就学を決めた。

元地球連合軍人たちは、うち2名が本国への送還を希望。

正確には最後まで軍人であることを貫いたナタル・バジール少尉が亡命を拒否。そんな彼女を見捨てられなかった操舵手アーノルド・ノイマン曹長もまた亡命を拒否。そろって3月25日、オーブ滞在中の大西洋連邦使節に身柄が引き渡されていた。

なお、彼らは即日、本国へと身柄が移され、そこで事情聴取を受け、今朝方、軍法会議を経て事実上の無罪放免が言い渡されている。脱走

は当時、最も階級の高かったマリユール・ラミアス大尉ならびにムウ・ラ・フラガ大尉に責があり、少尉と曹長にすぎなかった両名には責はない、という扱いになったのだ。ついでに二人にはさらなる教育課程が命じられている。おそらくヘドミニオン〈クルーに内定しているのだろう……

残る元地球連合軍人たちは、いずれも亡命を希望した。

原作と異なり、オーブ連合首長国本土防衛軍で一定期間、軍務に付くことが求められたが、内容がアークエンジェル級とMSの運用に関する研究が主とされたため、迷うことなく全員が同意したようだ。

こうして彼らはオーブ合首長国本土防衛軍に所属しつつ、モルゲンレーテ社に出向し、それぞれの新たな日常をスタートさせていくことになる。

さて。

残る2名、フレイ・アルスターとキラ・ヤマトに関してだが……

「邪魔をするな！ ユウナ、話が——つて、なんだこの部屋!!」

SPを足蹴にしながら俺の私室に乗り込んできたのはオーブの暴走姫、カガリ・ユラ・アスハその人だった。というか、人の私室に怒鳴り込んできて「なんだこの部屋」とはどういう了見だ。

「研究中。邪魔だ。出てけ」

部屋に持ち込んだ多種多様の工作機器やらパーツやら素材やら何やらかにやら。もはや室内はガラクタ倉庫も同然であり、さらには俺が向かう執務机は配線とパーツでゴチャゴチャどころではない電算装置がブオオオオンと音をたてながら動いているわけで。

いやね。デバイスであるリングロードの性能を誤魔化そうと電算装置を取り寄せて好き勝手にいじったのはいいんだが、ついそれが面白くなって魔改造しまくった結果がこれだったりするんだわ。

おかげで各種設計やデータの作成がはかどること、はかどること。

ちなみにこの世界の開発ペースは他のガンダムシリーズ同様、異常としか言いようがないレベルにある。原因は全自動加工技術の発達だ。おかげでこの世界ではベースとなるデータをどうにかできれば、けっこういろいろなものが作れてしまうのだから笑うしかない。

「カガリ様、ユウナ様の邪魔は……」

「邪魔はおまえたちだ！ さっさと出ていけ！ 内密の話だ!!」

はあ……どうせ、このお姫様は何を言ってもきかないのだ。

目で退くようSPに告げると、渋々といった様子で彼らは下がった。

俺は溜息をつきつつ、作業画面を無難なものに切り替える。モニターは全て部屋の奥側を向いているので、入口側から近づいてくるカガリには見えていないのだ。

彼女が機材で埋まる机を迂回してきたところで椅子をそつちに向ける。

「それで、今度はなんだ」

「チカラを貸せ」

……なに、このバカ。

「1月の終わり頃だったな。前におまえが怒鳴り込んでいたのは」

「あれは！——あれは…………」

ヘリオポリス崩壊事件後、キサカの機転で早々にオーブへと舞い戻ることができたカガリはウズミと親子喧嘩したあと、俺がMSのナチュラル用OSを開発したばかりか、さらなる技術を提供していると知ると共に我が家に怒鳴り込んできたのだ。

——貴様、どうしてそんな才能があることを隠していた！

——それでもオーブの氏族か!?

——いや、それよりも兵器を作ってどうするつもりだ!!

——あんなものがあるから戦争が起こるんじゃないか!!

支離滅裂だが、正義を自認するバカほど「それはそれ、これはこれ」と都合よく意見を切り替え、矛盾する言動をとりまくるのは古今東西の真理でもある。

だから俺は無視した。

が、それに怒ったカガリはローキックを放ってきた。

キレたね。マジギレしたね。

——思い通りにいかなけりや暴力か！ すばらしい平和主義者だな！

——つーか、何様のつもりだ！

——人のこと今日まで馬鹿にできて、今になってなにつつかかかってきやがる！

——アスハだから、女だからって、何でも許されるとでも思っているのか！

【超叡智】から近接格闘術を引つ張りだし、【超才能】で己自身をフルブースト。

我ながらほればれする身のこなしでカガリにローキックのお返し。

——ボキッ

カガリの骨が折れました＼(´o´)／

その後、大騒ぎになったわけだが、すでに次世代機動兵器開発の切り札扱いをうけていた俺と、問題行動ばかりのカガリとでは、どちらに分があるかわかろうというもの。おまけに事はカガリがセイラン家に怒鳴り込んだ上で起こっているのだ。

俺は無罪放免。カガリは緊急入院。単純骨折だったため、進歩している医学技術のおかげで翌日には骨もつながり、退院したそう。で、その足で再び海外に旅立ち、ゲリラに加わり、あとは原作通りの流れになった。という感じらしい。

原作同様、カガリはへアークエンジェルと共に帰国。オーブ内におけるアークエンジェル組が扱いが悪くないのは、カガリの件を黙ることに対する謝礼的な意味合いがゼロではない。

帰国時点で現役の代表首長の一人娘だったカガリが国外でゲリラ活動に従事していたなど、スキャンダルどころの話ではない。さすがの俺も、これの暴露は自重した。というか、すでにこの頃には、どの国もそれどころではない状況だったからスルーさせてもらった、というのが真実だ。

そんな問題児である彼女は、帰国から今日まで事実上の監禁生活を余儀なくされていた。それでも情報だけは何らかの手段で——というよりキサカだろう——手に入れていたらしく、外出が許可されるなりアークエンジェル組と再会、そしてどういうわけか、俺のところ

再び怒鳴り込んできた、というわけだ。

「あ、あれは……私が悪かった。謝る。この通りだ」

カガリは男らしく頭を下げてきた。

なんでかなー。

黙っていれば美少女なのに、いちいちこういうところが妙に漢っぽいんだが。

「その上で頼みたいことがある。手を貸してくれ」

「なにを」

「アルスターだ」

「……はあ？」

「フレイ・アルスター。〈アークエンジェル〉で一緒だった。助けてやってくれ」

ええっと……話が全然見えないんだが。

「助けてって、なにをさせる気だ」

「おまえがジョン・ドウなんだろ」

おい待て。

「なんでそうなる……」

「お父様がそう言ってた。ユウナなら、ジョン・ドウの真似事ができるかもしれないって」

ウズミいいいいいい！

決めた。

潰す。

マジで潰す。

「できるんだろ。ジョン・ドウの真似事」

「できるかボケ」

「嘘だ」

「ジョン・ドウがどれだけ非常識なことやらかしてるのか、わかって言ってるのか？」

「おまえだって非常識だろ」

ダメだこいつ。どうしようもない。

俺は机のインターフォンを押し、

「姫様がお帰りだ。誰かお迎えを」

と一方的に告げ、椅子を机上の幾つもあるモニターへと向けた。

「ユウナー」

「ジョン・ドウの真似事？ 奴のせいで俺のことが暴露されてるのにな？ 暴露のせいで俺がなんて言われているがわかって言ってるのか？ 自分可愛さに能力を隠していた臆病者、自分さえ良ければ庶民を犠牲にする卑怯者、自分勝手な男に氏族の資格なし、さっさとセイラン家から追い出せ……」

俺はオーブ国内のメディアアコラムを画面に次々と表示させながら記事を読み上げていく。

「そ……そんな…………」

本当に知らなかったらしく、カガリの顔から一気に血の気がひいていった。

こういう正直なところは美点だ。

だが考えるよりも先に動いてしまうのは指導者層として不合格だ。

「失礼します」

ドアが開き、SPたちがぞろぞろと入ってくる。見ると廊下には完全武装した警備員や医師・看護士の姿もあった。以前の件もあるので、大急ぎで呼ばれたのだろう。

「連れてけ」

「はっ。カガリ様、こちらへ……」

カガリは抵抗することなく、促されるまま退室していった。これには集まった一同も少なからず驚いてはいるが、安堵している部分のほうが大きいらしい。

はてさて。

嵐とまでは行かないが、暴走姫が通り過ぎていった後の室内は妙に静かになった。しばらく黙り込んだ俺は、妙に気になったのでフレイ・アレスターについて電子精霊網であれこれと情報を集めてみることにする。

すると出てくること、出てくること。

「うわぁ……」

端的に言えば死んだ父親の遺産が全て、親戚たちに奪われていた。裁判を起こせば取り戻せるものも多いだろうが、北米のフロリダにある実家はすでに取り壊し工事が進んでおり、売却先の企業によって周辺の土地もろとも今年中にリゾート施設となることが決定している。これでは裁判で勝っても戻ってくるのは金だけだ。もはや思い出の家は跡形もなくなっている……

「これはへこむな……うおつと」

ついでにオーブの情報当局による監視記録を調べてみると、偶然にも同棲状態のキラ・ヤマトとベッドでいたしている場面を見てしまった。

「んっ？　なんで同棲してんだ？」

調べてみるとキラ・ヤマトはオーブに保護された後も家族とは一度面会しただけで、以後はフレイと共に被災者用集合住宅の一室に籠もり続ける日々を過ごしていた。

時系列順に経緯を調べてみる。

まずオーブ入国後、自分たちの状況を知ったところでフレイ・アレスターが情緒不安定になる。一時入院中にキラ・ヤマトは家族と面談。だがそこで、キラ・ヤマトもまた情緒不安定になっていることが発覚。ただ本人は、とにかくフレイと共にいることを希望する。

結果、数度のカウンセリングを経てフレイが被災者用集合住宅の無料提供を受けてそこに移住。キラがそこに押し掛ける形となり、時に暴力的になりつつも、別の時には彼の肉体を求めるなど、あきらかにおかしくなつたフレイの傍らに居続けることになる……

で、カガリはそうした状況をようやく聞き知り、まずは親戚に奪われたものを取り返そうと考えた。その手段が、ジョン・ドウの真似事ができるかもしれない俺に頼るといふものだった。という次第だ。

「……って、もう大丈夫だろ。この二人」

記録によると一昨日、キラもまた無力感に苛まれるあまり感情を爆発。壁に頭を何度も叩きつける自傷行為を起こしている。これがフレイにとってのショック療法になったようだ。昨日や今日は一緒にTVを見てばかりいる。映像監視による精神科医の間接診断による

と、共依存の傾向があるものの良い兆候を示しているんだとか。近々、カウンセリングを再び持ちかけ、PTSDの治療を通じて社会復帰を促してはどうかと報告書の私見に書かれていた。

「これからどうするのかねえ、この二人」

原作だとフレイは、ラウ・ル・クルーゼによるNJC（ニユートロ
ンジャマーキャンセラー）の技術流出に利用されたばかりか、最後の最後に、キラの目の前で殺害されている。種死のキラがラクス教の熱心な信者と化してしまったのは、ある意味、そのせいだったのかもしれない。

だがこの世界では元凶たるラウ・ル・クルーゼが軍法会議の末に処刑されている。

キラも特段、SEEDとして注目されていない。

というか注目していた“一族”もない。

まあ、全て潰したつもりだが、“一族”の残党が残っている可能性も否定はしない。しかし、なにか行動を起こしたら、その時点で改めて潰すだけだ。他の件はともかく、陰謀と裏工作で世界と人類をどうしようという連中には、同じ次元で対応させてもらおう。

「……まっ、それ以外は、俺がどうこうする立場でもないよな」

それよりもやるべきことがいろいろとある。

いやね、 Rond 兄妹を排除したせいで、アメノミハシラの総督に俺が就任することになったんだわ。どうせだから〈アークエンジェル〉もアメノミハシラで改修しようと考えているわけだが……

ふむ。

今まで自重していたが、固有魔術化を計画している『ゼロの使い魔』の「錬金」と「固定化」と「偏在」で念願の次元航行船化も可能になるかもしれない。ついでにワンマンオペレーションを可能にして、「偏在」で魔改造したMSを搭乗させて……

って、どこまでボツ思考だな、俺。

でもなあ。チートだから、魔改造したものに他人を絡ませるわけにいかないからなあ。

はあ……さすがに仲間が欲しい今日この頃だわ。

W
S
I
D
E

E
N
D

第6話 引越ですか。そうですか

>>>CE71.04.05 本島@オーブ/ユウナ・ロマ・セイラ
ン

ラウ・ル・クルーゼの極刑が言い渡された3月24日、

——ボッチが嫌なら分身すれば良くね？

という逆転の発想によつて、俺は『魔法少女リリカルなのは』のミツトチルダ式魔法と、『魔法先生ネギま！』の数々の神秘、さらには『ゼロの使い魔』の「錬金」、「固定化」、「偏在」の3つを固有魔術化する形で、ニューロリンカーという魔術基盤に刻み込むことにした。

これにより俺は「偏在」で最大108人に分かれることが可能となった。

つて、多すぎるわ！

そこで本体を私室に残しつつ、アルハザード式魔導術式による「封時結界」の中に「偏在」を4人ほど送り込む形で魔法の鍛錬と検証に励ませてもらった。そこで判明したのは、「偏在」が得た知識と経験は任意のタイミングで「同調」すると本体にフィードバックされる仕様になっていたということ。つまり『NARUTO』の「多重影分身の術」に匹敵するチートであることがわかったという感じだ。

そこで俺は固有魔術の「錬金」と「偏在」をさらにチート化させることにした。

こうして3月末日には、「錬金」がナノ単位で形を変えられる「錬金変形」と、「超叡智」で知る物質なら何でも生み出せる「錬金生成」、「偏在」が受肉した変身済みの偏在を生み出せる「変化偏在」へと進化させるに至った。

なんかもう、どうにでもなれ〜って感じだ。

そう呆れている中で爺様から持ちかけられたのが、俺のパテント料に関する話とアメノミハシラ総督および宇宙軍司令長官の就任話だ。

なんでも「ヘアークエンジェル」が持て余されているらしい。

またサハク家失墜後、宇宙軍の扱いが宙に浮いているらしい。

そこで俺は「ヘアークエンジェル」を俺の個人企業であるフロンティ

ア社に現物支給するなら、パテント等をチャラにする案を提示した。これが早々にOKになったのだから苦笑するしかない。

しかも現物支給されたのは〈アークエンジェル〉以外にも〈ストライク〉2機、〈アストレイア〉4機、スタージョン級シャトル2機、コーネリアス級航宙艦2隻だった。このオマケは単純にパテント料に見合う金額を査定した結果と、オーブ本土防衛軍で極秘開発していた偽百式こと〈アカツキ〉の開発をお願いするために色をつけた結果だったらしい。

「つまりオマケはご機嫌取りつてこと？」

「まあ、そういうことだな」

正式な受領書類を持ってきた父さんは、苦笑まじりでそう答えた。さもありません。

〈アカツキ〉の開発チームは意固地になつて俺の関与を拒否し続けてきた。それが今になって態度を変えたということは……ああ、原作でも武装の開発が遅れて頑種時代には間に合わなかった、みたいな設定があつたな。その絡みか？

「で、どうする？ 〈アカツキ〉は開発を中止してもかまわんのだが……」

「好きに改造していいなら、やってもいいけど」

「そうか？ じゃあ、頼む」

この時点で俺が〈アークエンジェル〉と共にアミノミハシラに赴任することは決定していた。よって、〈アカツキ〉も宇宙に上げることが決定。

「ところでスタージョン級とコーネリアス級だけど、どこに余つてたやつ？」

「もらいものだ」

「えっ？ ——あつ、NOS？」

なんでもちようど一昨日、大西洋連邦とユーラシア連邦にNOSを販売する決定を首長会議が下したらしい。それに先立ち、両国から旧アルテミス所有権と建造途中で放棄されていたシリンダー型コロニー1基の所有権、またスタージョン級8機、コーネリアス級4隻、ド

レイク級4隻、ネルソン級1隻、アガムムノン級1隻が譲渡されたそう
うだ。

大盤振る舞いである。

ただ、これには裏があつて……

「それでな、ユウナ。できればドレイク級とネルソン級を——」

「改修しろつて？」

「無償で、ということになってるんだが」

「あー、やっぱり」

いわゆる改修型にすれば良いってことか。

大した手間ではない。あとでサクツとやっておこう。

ちなみにフロンティア社に譲渡された以外の艦艇は、スタージョン
級2機が本土防衛軍預かりになることを除くと、残りすべてが宇宙軍
預かりとなるそうだ。すでにスタージョン級は全機納入済みだが、宇
宙艦艇は後日、月面基地に引き取りに来て欲しいそうだ。

「こつちから月面に？」

「ああ。向こうから運ぶと、途中でZ A F Tに落とされそうだな」

なるほど。確かに。

というわけで早速、引越しの準備をスタート。どうせなので、今
後も考えて「変化偏在」の一部に、電子精霊網を駆使した偽の戸籍を
用意。またフロンティア社の無駄に溜まっていた資産を浪費する意
味で独自のヘリオポリス再建計画を立案。爺様に打診すると即日O
Kが出たので宇宙軍再編成計画に取り込むことにした。

んで、あれこれやってるうちに日時が過ぎて4月17日。

原作ではへアークエンジェルとザラ隊の最後の死闘によりトール・
ケーニヒが戦死、キラ・ヤマトがM I A(戦闘中行方不明)となり、ディ
アッカ・エルスマンがへアークエンジェルへの捕虜となったその日、俺
は正式にオーブ連合首長国軌道ステーション「アメノミハシラ」総
督とオーブ宇宙軍司令長官に就任。またヘリオポリス再建事業最高
責任者にも任命され、

「はあ……自業自得とはいえ、やること多すぎだろ」

と溜息をつかずにいられなかった。

だが嘆いていても仕方が無い。

本島で就任式を済ませた俺はカグヤ島のマストドライバーステーションに向かい、そこで出発準備をしていたへアークエンジェルに乗り込むことにした。

「総督閣下、お待ちしております」

搭乗口では女性士官と男性士官が待ちかまえていた。

セイラ・アブナズル——フロンティア社所属技術試験艦へアークエンジェル艦長に大抜擢されたオーブ生まれ、南アメリカ合衆国育ちの、元南米合衆国海軍士官。という身分を偽造しておいた「変化偏在」の一人だ。

見た目は初代『ガンダム』のセイラさんそのもの、と言えはわかる人にはわかるだろう。

と、なれば、もう一人もわかるはずだ。

シャア・アブナズル——フロンティア社MS部隊隊長に抜擢されたセイラの実兄にして元南米合衆国空軍士官。という身分を偽装しておいた「変化偏在」だ。もちろん見た目はシャアその人。現在は袖こそノースリーブではないが、サングラスをしているクワトロ・バジーナ版になっている。

共に軍には所属していないが、フロンティア社内では一佐待遇にしてある。

「出発準備は？」

「いつでも可能です」

「じゃ、早速」

「はっ」

SPがいるので茶番をこなしつつへアークエンジェルに乗り込む。程なくしてマストドライバーを使い宇宙に向け出発。

へアークエンジェルへ入港後、俺が提案した種死時代と同様の改修が施されているため、実を言えば単独での大気圏脱出も可能だったりする。だが、せっかくマストドライバーが使えるんだから、今回は使わせ貰ったわけだ。

続けてスタージョン級シャトル2機も打ち上げられてくるだろう。

マリユール・ラミアス技術一佐やムウ・ラ・フラガ一佐をはじめとする亡命組は、ほぼ全員がこっちのシャトルに搭乗している。特にマリユール・ラミアスには今後の地球連合軍艦艇改修計画の要になってもらう予定だし、ムウ・ラ・フラガにはMS大隊を押しつけてアミノミハシラ防衛の中核になってもらおうつもりだ。いろいろと期待しているので、是非がんばって欲しい。

〈でもその前にアミノミハシラそのものの魔改造でしょ?〉

〈おい。待て。セイラ。偏在でもおまえは俺だろ。念話での女言葉やめろ。きしよいわ〉

〈へえ。じゃあ、同調しなくていいんだ。夜戦演習の〉

〈すみませんごめんなさい俺がわるかったです〉

「マルチタスク」で思考を分けているだけのはずだが、どうも「変化偏在」すると主人格(?)を演じる思考部分が自然と活性化することが増えてきた。つまり、一人上手になってきたってわけだ。

……なんだろう。余計、悲しくなってきたぞ?

はあ……こんなチート野郎だから、それも仕方ないが。下手に理解者とか求めたら、そこから破綻していくの、見え見えだからなあ。

〈それより本体。ひとついいか?〉

〈シヤアか? どうした?〉

〈質問はMSについてだ。魔改造しないのか?〉

〈魔改造か……悩んでるんだが……〉

〈気持ちはわかる。そこでだ、魔改造するならシヤア系のMSにして欲しい〉

〈自分でシヤア言うな〉

〈だつてシヤアだぞ? クワトロ大尉だぞ? ガンダムとは違うのだよ、ガンダムとは〉

〈あー、いつそ〈サザビー〉にでもするか?〉

〈ねえ。赤い〈ストライクフリーダム〉っていうのは?〉

〈シヤア専用〈ストライクフリーダム〉? なにそれ燃える〉

〈そういえばこの世界だと〈フリーダム〉、計画倒れだっけ?〉

〈ええ、そうよ。この世界だと〈フリーダム〉はクライン派、〈ジャス

テイス」はザラ派が推し進めてた計画だったんだけど、クルーゼの一件でバタバタしてるうちに開発関係が一時、ザラ派に染まったらしいもの。おかげで「フリーダム」は設計以前の段階で開発中止。その分の生産力を「ジャステイス」に費やしたことで、もう4機も稼働しているわけだし」

ザラ隊にアスラン用とニコル用、ジュール対にイザーク用とディアッカ用が配備されている。この世界の核動力機は、試作型の「ヘドレッドノート」を含めても、これら五機だけである。

「ああ、そういえば「ジャステイス」改修案にファトゥムの砲撃戦能力強化っていうのがあったな。この流れだと、もしかしてファトゥムだけを切り替えた中長距離戦用「ジャステイス」とか出てくるのか？」

「フリーダム」涙目……」

「好きなんだけどなあ、「フリーダム」と「ストライクフリーダム」……」

よろしい。ならば作ってしまおう。オーブ製「フリーダム」ってやつを。

いや、この場合はフロンティア社製「フリーダム」か？

オーブの兵器開発許可は貰っているから、やってしまおう。

「じゃあ、「アークエンジェル」はどうする？」

「アークエンジェル」か……」

「魔改造したいところだけど……」

ここが悩み処だ。すでに改修しているとはいえ、理想を言えば『機動戦艦ナデシコ』のオモイカネ型量子コンピュータを搭載してワンマンオペレーションを再現してみたい。というか、俺のチートを十全に発揮するには、余計な人間を排除しないといけないのだ。さもないと魔法とかバレかねないし。いや、最悪バレても、どうにもでなるが。

「よし。決めた。やろう」

「どこまで？」

「まずワンマンオペレーション」

「はい。艦の運用にロボットが必要になると思いまーす」

「ハロか」

「ハロだな」

〈『SDガンダムフォース』の?〉

〈〈…ないわー〉〉

『SDガンダムフォース』はさすがにオーバーテクノロジーすぎる。自我を持つ人工知能が当たり前のように存在する世界なんて、危なっかしくて手を出す気になれない。

〈定番は『ナデシコ』のコバツタだな〉

〈『スパロボ』系は?〉

〈いつそ『スターウォーズ』のドロイドって手も〉

悩んだ結果、オモイカネ型量子コンピュータをコントロールユニットにした、『スターウォーズ』のR2シリーズ・アストロメク・ドロイドの採用を決定。外見的な威圧感が少ないことが採用の決め手になった。

〈そうなるよ〉〈フリーダム〉も魔改造したくなるなあ〉

〈へストライク〉からの魔改造だろ? 〈へストライク〉、もう1機あるけど?〉

〈そつちは近接寄りにしてへノワール〉に?〉

〈魔改造へストライクノワール〉は、アリだろ〉

〈へアストレイア〉は手つかず?〉

〈いつそMD (モビルドール) 化して母艦を守らせる?〉

〈アリだな〉

〈アリアリだ〉

〈そもそも必要ないんじゃないの?〉

もはや単なる脳内会議だ。

しかも、意見を言い合いながら「マルチタスク」で実際に設計等を始めている始末。

もつとも、考えてみればこの世界で前世を思い出した直後、俺が何を求めたかといえば、実物のMSに乗ってみたい、なんていう馬鹿馬鹿しい欲求だった。その結果、いろいろあつて今に至っているわけだから…むしろ、こうなるのが自然なのだと思う。

そんなこんなで、そろそろアミノミハシラだ。

さーて、新天地でもガンバってみますか!

W
S
I
D
E

E
N
D

第7話 来客ですか。そうですか

>>>CE71.05.13 アメノミハシラ／ユウナ・ロマ・セイラン

「失礼します。〈アークエンジェル〉並びに第一戦隊、任務を終えて帰還しました」

「お疲れ。次の任務は再編成後になるから、それまで総員休暇ってことでよろしく」

「はっ、ありがとうございますー！」

オーブ宇宙軍第一戦隊司令に答礼した俺は、拡張されたドックを横目に、予定されている来客と会うべく歩き出した。

あれから約一ヶ月。

俺のテコ入れと魔改造、さらには地球連合軍艦艇の導入によって、アメノミハシラと宇宙軍は以前とは比ベモノにならないほどしっかりとしたものに変貌している。

まずアメノミハシラはドックを拡張、さらに“アルテミス”の発展系であるモノフェーズ光波防御シールド——内側から攻撃可能という点が違う——が常時展開され、虹色の正十二面体に覆われた鉄壁の軌道ステーションに生まれ変わっている。

宇宙軍はドレイク級4隻、ネルソン級1隻、アガムノン級1隻をようやく受領。名目上は第一戦隊と名付けたイズモ級万能航宙艦一番艦〈ヘイズモ〉と同二番艦〈クサナギ〉の訓練航海を兼ねて往復させたところだ。もちろん、受領した地球連合軍艦艇は、この1ヶ月で教導したオーブ宇宙軍の新米たちが動かしてきた。

なお、当たり前のように往路の途中でZAFの通商破壊部隊と遭遇している。

だがムウ・ラ・フラガー佐率いるMS二個中隊18機が出撃するだけで十分な威圧になったばかりか、〈アークエンジェル〉から出撃した〈フリーダム〉——色は元ネタのまま——による遠距離からのフルバーストで敵機全ての腕や足だけ吹き飛ばして見せたら早々に退散してしまった。

搭乗者はシャア・アブナズル。というか俺の「変化偏在」。種割れの必要もなく、「マルチタスク」演算だけでハイマツト・フルバースト、余裕でした。

当然、そんなものを見せられたせいでアメノミハシラ帰還後、ヘアークエンジェル専用ドックが関係者以外立ち入り禁止になっている関係で、そこにいるシャアが捕まえられないとわかったムウ・ラ・フラガ一佐は――

「閣下！ お尋ねしたいことがあります！」

移動中の俺の前に飛びだし、ビシツと敬礼してきた。

その向こう側には、あちやー、と額を手で押さえているマリユールミアス技術一佐の姿がある。ああ、止めようとしたが無理だったのか。まあ、そうだろう。

「なんだ、ムウ・ラ・フラガ一佐」

「はっ！ 任務中、フロンティア社で改修したヘストライクを拝見致しました！ あれはオーブのパワーエキスパンダーだけでは説明できない出力があります！ それを可能とする動力といえば――」

「核融合」

「核……はあ？」

「だから、核融合。NJ（ニュートロンジヤマー）は核分裂を阻害する。だが核融合は阻害しない。だからこそ、艦艇用の核融合炉は何事もないように動いている。そいつをMSサイズまで小型化した試験実証炉をアレにぶちこんである。もつとも、あれ一機でイズモ級十隻分の予算だ。フロンティア社の貯蓄が吹っ飛んだからな、実用化なんてまだまだ先の話だ」

実は『スパロボOG』シリーズのPT（パーソナルトルーパー）用核融合ジェネレーターを再現しただけなので、コストはそれほど高くない。というより、ヘフリーダムの本当のチートさはそれ以外の部分にある。

まず装甲。試行錯誤してみたらガンダニューム合金のVPS装甲化が可能になった。これにより総重量は80.09トンから驚きの9.50トンに激的ダイエットしてしまった。

また、VPS装甲化によりステルス性は失われたものの、なんとVPSガンダニューム合金装甲はエネルギー次第で物理のみならず熱光学作用も無効にする完全装甲に進化することがわかった。おまけに「固定化」をガツチリかけているので、その頑丈さは某マジンガーの領域だ。

さらに推進機関は現時点ではオーバーテクノロジーのVL（ヴォワチュール・リュミエール）システムを採用。それこそ、どこのリンクスだと突っ込みたくなるような超音速戦闘が普通にできるレベルになっっている。

おまけに兵器類。魔法で水を生み、水を「錬金」して弾薬にする生成水錬金式無限弾薬供給装置が完成。【超叡智】という根源に繋がっている俺か、俺の「変化偏在」が搭乗していれば弾薬の心配がゼロになるという実にチートな仕様が再現されてしまった。

あつ、機体の損傷や摩耗は修復術式で自動回復されるのは言うまでもない。

核融合ジェネレーター用の燃料も生成水錬金式で常時補給状態。

つまりこの世界の〈フリーダム〉はHP無限回復、弾薬消費ゼロ、エネルギー消費ゼロのユニットに仕上がったというわけだ。うん。それどこの改造コード使用機だって話だな。我ながら少しやりすぎたと思う。

一方、〈アークエンジェル〉は対して手を加えていない。

ただ、装甲を全部変えた。といっても〈フリーダム〉もそうだが、「錬金」で変形と素材変換をやっただけとも言える。今の俺ならアミノミハシラ丸ごとぐらいなら一発で素材変換が可能なので……って、俺のチート、どこまで底なしなんだか。

装甲は〈フリーダム〉と同じVPSガンダニューム合金装甲。カラーリングをわざと変えていないのでVPSであることは誰にもバレていない。ついでに総重量が十分の一になったので、機動力は以前の数倍だ。

推進力はレーザー核融合パルス推進のまま。変えると目立つので手をつけていない。

主動力も今までと同じレーザー核融合タービンのまま。

大きな違いはオモイカネ型量子コンピュータを制御中枢とし、ニューロリンカーを入出力装置としたワンマンオペレーションを実現したところ。また、補助用にR2ドroid1000体が船内に配置している。

武装もそのまま。ただし、R2ドroidと一体化した無限弾薬供給装置を組み込んだのである。積み込んだ弾薬は全て水に「錬金」してストックしてあるので帳簿上の問題もある程度は誤魔化せると思っている。

ちなみにへフリーダムへしろへアークエンジェルへしろ、改修に必要な予算等は全てフロンティア社が払っている。帳簿上の問題は、電子精霊網を駆使し、どうにかしておいた。機密上の欺瞞工作も行っているため、へフリーダムが単機で戦艦十隻分の予算を投じられたとしても何も問題はない。

「戦艦十隻分……」

ムウ・ラ・フラガー佐は、そうつぶやきながら顔を引きつらせていた。

「そういうことだ。あー、核動力機じゃないが、オーブ軍のフラグシップとしてへアカツキへってやつを開発中だ。フラガー佐も乗ってみるか？ つまらんと思うが」

「つまらない？ というのは？」

「こうね、後ろからデュートリオンビームっていう充電ビームを常に受ける形で動く機体になる予定なんだ。可視光が透過する球状のモノフェーズ光波防御シールドを展開しつつ浮かび上がって、へフリーダムみたいな中長距離からの砲撃を行う感じ。ついでに金色だから目立つし、不沈だしで、MSって言うより移動可能な固定砲台って感じの代物。パイロットとしてはつまらんだろ？」

「あー、確かにつまらん機体だなあ」

「ムウー！——閣下、お騒がせ致しました。ほら、もういいでしょ」

「えっ、あ、いてててて！ 耳ひっぱるなって！」

「……………」

リア充爆発しろ。おまえらは未永く爆発してろ。結婚式に祝電のひとつくらい送ってやるから、ムウ・ラ・フラガはささつと人生の墓場に特攻すればいいと思う。

「あー、マリユール・ラミアス技術一佐！」

「は、はいッ！」

「艦艇の改修は明後日からだ。今日はフラガ一佐とゆつくりするとい
い」

「えっ……」

「あとフラガ一佐、入籍はさつさと済ませろ。さもないとアミノミハシラの家族用居住区が全部埋まるぞ」

「あー、ええつと……」忠告、感謝いたしますッ！」

「え、あ、ちよ、ちよつと、ムウ……」

そんな感じで二人をいじった上で待たせている来客の下へと向かった。

「お待ちせしました——マルキオ導師」

「いえ、こちらこそお忙しい中、予定をさいて頂きありがとうございます
す」

マルキオ導師——頑種世界で最も謎の多い人物だ。この世界では、かつて普遍的な教会の枢機卿をしていたそうだが、ジョージ・グレンの出現から始まった宗教闘争に失望して還俗。いつしか“SEEDを持つ者”の可能性を“遺伝子操作による優劣とは関係のないヒトと世界が融和しうる認識力の変革”であると説くようになり、SEED教とでも言うべき新たな一派を築くまでに至った人物でもある。さらにジャンク屋組合を国際組織として各国に認めさせたのも彼なら、『ASTRAY』でいろいろと暗躍(?)しまくったのも彼だ。特に『X ASTRAY』では、シーゲル・クラインによるNJC(ニュートロンジャーマーカーキャンセラー)漏洩に深く関与した人物として描かれている……

あー、そうそう。

5月1日には原作通り、このマルキオ導師が地球連合事務総長ジョアン・オルバーニに託された親書、通称「オルバーニの譲歩案」をプ

ラントに持ち込んでいる。

だが、パトリック・ザラ政権となったプラント評議会は相手にせず、5月5日にはオペレーション・スピットブレイクを発動、8日にアラスカを攻略したが、ラウ・ル・クルーゼが刑死していたにも関わらず大量破壊兵器“サイクロプス”による自爆を決行、侵攻してきたZAF T諸共アラスカ基地が吹き飛ぶ結果になった。

これによりZAF Tは攻撃部隊の8割を失った。また地球連合軍はユーラシア連邦軍、東アジア連邦軍のみならず大西洋連邦軍にもかなりの被害が生じている。

どうやら地球連合軍は最初からアラスカが狙われることを想定し、サイクロプスの配備を行っていた形跡がある。原作では情報リークを受けて、さらにブルーコスモス派が保身に走っただけ、というのが真相なのだろう。

ちなみにこの世界ではヘフリーダム〈強奪事件も、さらにはヘドレッドノート〉盗難事件も発生していないので、クライン派の粛正そのものが起きていない。

キラはオーブ本土でフレイと共に復学しているし、

ヘフリーダム〈そのものが製造されていないし、

こつちがヘフリーダム〉を出したせいでヘドレッドノート〉を盗み出せる機会がゼロになってしまったわけ。

いやね、開発計画が漏洩したんじゃないかって大騒動になったらいいんだわ。ただ、プラントのインテリジェンスは、さすがにこつちがこつそり流しておいた“NJ Cを使った核動力機ではなく実験的なMS用核融合炉使用機”だという情報を掴んだことと、ヘフリーダム〈の設計すら始まっていなかったことから、コンセプトが同じだったがゆえの偶然の一致という線でおさまるようだ。

ヘフリーダム〉の外観がヘストライク〈やヘアストレイア〉と同系統だったことも偶然を納得する一要素だったらしいが、
で。

そんな中、プラントから戻ってくる途中のマルキオ導師が、どういうわけかアメノミハシラへの寄港を望み、しかも俺との面会を求めて

きた。相手が相手なので断るわけにもいかず、こうして会っているわけだが……

「早速本題に入っても良いかな？」

「ええ。私にもいろいろとあるので」

切り出してきたマルキオ導師の言葉に、俺は応接間のソファアに座ることを促すことで応えた。向かい合うソファアに腰を下ろしあつた俺とマルキオ導師だが、盲目の思想指導者は真剣な面立ちで、突然、こんなことを尋ねてきた。

「君はこの状況を知つてなお、他人事だと切り捨てるのかね？」

「……質問の意味がわからないのですが」

「ヒトは生まれながらにして平等ではない。それは、能力に応じた責任があるためだ」

「……はあ」

「君の能力に応じた責任を果たすべきでは？」

「おいおい。まさかこの坊さん……」

「——俺が“SEEDを持つ者”だとも言うつもりか？」

対外的な仮面を被る必要性を感じなくなったので、素で応対してみる。

「そこが問題なのだよ」

それが当然とばかりに、盲目の爺さんは光を失った目で俺をしつかりと見据えてきた。

「優れた種への進化の要素であることを運命付けられた因子（Superior Evolutionary Element Defined-factor）……SEEDとは宗教的観念でもなければ、荒唐無稽な願望でもない。遺伝子操作では生み出せない、特別な遺伝的因子であることは確定している。すなわち、検査によってSEEDホルダーか否かを客観的に調べられるということでもある」

「へえ。それで？」

「君にSEEDはない。それは確かだ」

「だろうね」

ユウナ・ロマ・セイランがSEEDホルダーであるはずがない。俺

の異能は神様(?) 謹製のチートによるもの。むしろ荒唐無稽の領域でなければ理解しようもない代物だ。

「だが君には特別なチカラがある。その類い希なる頭脳が、まさにそれだ」

「で?」

「協力を求めたい。キラ・ヤマト。彼は特別な人間だ。そしてもうひとりの特別な人間、ラクス・クライン。君には、キラ・ヤマト君と共に彼女を助けて欲しい。そして、その類い希なる頭脳でSEEDホルダーを支えて欲しい」

「……………はい?」

「君の頭脳は危険なのだ。正しい導き手がいなければ、君の叡智は世界を滅ぼす可能性すらある。だがSEEDの導きに従えば、君も人類の明るい未来に——」

「そういう話は間に合ってるんで」

俺は席を立ち、帰ることにした。

「逃げるのか、ユウナ・ロマ・セイラン」

鋭い声が俺の世に投げかけられる。一瞬、立ち止まりそうになったのは、さすがは世界的思想家の本領発揮といったところだろう。だが魔法研究の中で自己鍛錬も積み重ねてきた俺を圧倒できるほどのものではない。

「救世主に逃げてるあんたにだけは言われたくないね」

俺は手をひらひらさせながら退場させてもらった。

やれやれ。

本物の宗教家だったわけか。

キラ・ヤマトも狙われてるみたいだな…………裏から手のひとつぐらい回しとくか?」

∨∨SIDE END

第8話 開戦ですか。そうですか

>>>CE71.05.15 本島@オーブ／キラ・ヤマト

最近、僕たちに対する警備が一段と強まった気がする。気になって尋ねてみると、正規の訓練も受けずにMSで戦い抜いた僕を狙う組織があるらしく、背後関係が判明するまで、念のために警備を強化したという話だ。

「そう……まだ平穩には程遠いんだ……」

「ごめん、フレイ。僕のせいで……」

「ううん、キラは悪くない。悪いのは、悪いことを企むヒトたちじゃない」

彼女の優しい言葉が僕の中の不安や不満を一気に溶かしていく。

僕たちの間には、いろいろなことがあった。

運命の1月25日。ヘリオポリスと共に僕たちの日常が崩壊したあの日から、もう五ヶ月がすぎた。戦争を遠い出来事だと思っていた僕たちは、あの日、なんの前置きもなく、ヒトを殺さなければ生きていけない現実へと放り込まれてしまった。

殺し合いを強要される日々。

フレイのお父さんの死。

僕を復讐の道具にしようと近づいてきた彼女と、そうと気付きながらも彼女にすぎりついてしまった僕の過ち……

全てが無駄だったと知ったのはオーブにたどり着いてからのこと。

僕らは地球連合から犯罪者扱いを受けていた。

地球連合軍はすでに量産型MSの開発を進めていた。

僕らは不要だった。

〈アークエンジェル〉も、〈ストライク〉も、アラスカに運び込む必要がなかった。

ハルバートン提督や第八艦隊のヒトたちや、低軌道会戦で犠牲になった戦災難民……折り紙をプレゼントしてくれたあの子の死は、すべて、すべて無意味だったのだ。

父親の死も無駄扱いされたばかりか、遺産も親戚に奪われていると

知ったフレイは情緒不安定になり、入院した。僕も心が折れそうだった。それでもフレイを、フレイだけは、彼女だけは絶対に守ろうと、そう決意して彼女のそばに居続けて……

でも、僕もまた平静でいられなかった。

だから壁に頭を何度もうちつけた。

僕たちの関係が変わりだしたのは、その頃からだ。

フレイはようやく、僕を見てくれるようになった。

僕もすぎる相手ではなく、フレイとして彼女を見るようになった。

父さんと母さんに会いに行つたのは、それから間もなくのことだ。入国直後に一度だけ顔をあわせたが、その時になにを話したのか、実はよく覚えていない。ただ、どうしてもひとつだけ確かめたいことができたので、勇気をふりしぼって会いに行つた。

——父さん。母さん。どうして僕をコーデイネイターに？

頭の片隅で何かが引っかかっていたのだ。

だから、それを尋ねてみた。

その結果、母さんの口から衝撃の事実を教えられた。

——もう話すべき時なのね。キラ。あなたは私の妹夫婦の子供なの。

本当の父親の名はユーレン・ヒビキ。

本当の母親の名はヴィア・ヒビキ。

コーデイネイター化処置を行つたのは遺伝子技術者でもあつた父の判断、僕をヤマト家に預けたのは我が子を実験動物のように扱う夫を信じられなくなった母の判断。その後、メンデルがテロリストの襲撃を受けた際に父と母は生死不明に……

フレイのもとに帰つた僕は、全てを彼女に話した。

またわからなくなった。

僕はどうして生まれたのか。

モルモットなのか。

人間ではないのか。

ヒトではない何かだとしたら、僕はヒトを愛する資格があるのか

……

フレイはそんな僕を受け入れてくれた。
慰めてくれた。

抱きしめてくれた。

カウンセリングを受けるようになって、僕とフレイが共依存になりかけていると忠告された。共依存そのものは決して悪いことではないが、過度になると心のバランスが崩れるので職場等は分けたほうが良いとも忠告された。

フレイはオーブへの亡命を決意。学校に復学すると言った。

僕も学部は別だけど、復学することにした。

みんな、それぞれを道を歩みだしている。だからこそ、僕は、僕の道を進もうと決意したのだ。

福祉用ロボットの開発。

いろいろとあつたからこそ、僕は傷ついたヒトを癒す何かを生み出したかったのだ。

「……キラ？」

「あ、ごめん。研究のこと、つい考えちゃって」

「ふふ。研究、楽しい？」

「どうかな。まだ雑用ばかりだから」

「私も卒業したらそうなるのかな？ それとも……」

「それとも？」

「……………」

「……………」

お互い、恥ずかしくなって顔を逸らしあってしまった。

でも、そうか。

そういう可能性もあるなら……貯金、頑張らないと。指輪は月収三ヶ月分だっけ？

>>>SIDE END

>>>CE71. 05. 15 オノゴロ島@オーブ/ユウナ・ロマ・セイラン

リア充爆発しろ！ 末永く爆発しやがれこん畜生!!

「まっ、この様子だとマルキオ導師の横槍は無さそうだな……」

そうなるマルキオ導師一派の動向が気にかかる

あー、そうそう。

電子精霊網で徹底的に調べた結果、この世界のマルキオ導師一派は一族の傍系にあたる事が判明している。組織名は「ターミナル」。そう、種死で暗躍した、あの秘密武装組織ターミナルこそがマルキオ導師のバックボーンだったのだ。

しかもこのターミナル、頑種世界の元凶と言えることをいろいろとしでかしている。

ターミナルの主張はこうだ。

——自分たちで優秀な指導者を生み出して、そいつに人類の未来を預ければ良くね？

あくまで干渉者の立場を固辞する一族はこれを否定。ゆえに分派したわけだが、ターミナルは自らの主張を立証するべく、人造救世主をこの世に生み出そうとした。その結果、ある男の子が生まれ、類い希な才覚を示し、ターミナルの誘導を受けて、その人造救世主は自らの出生の秘密を暴露した……

人造救世主の名はジョージ・グレン。

この世界のコーディネイターは、一族分派のターミナルにより生み出されたのだ。

SEED仮説もターミナルの仕業。

というか、一族は改めて考えてみると謎が多すぎる。もしかすると他のガンダムシリーズと何かしらの関連があるのかもしれない。少なくともCE歴は〈▽ガンダム〉か〈ターンX〉の月光蝶でリセットされたあとの世界である点は黒歴史の設定からすると確定だ。電子情報上では不明な点が多々あるが、まあ、いずれ謎を解き明かすでしょう。

それよりも今はターミナル、そしてマルキオ導師についてだ。

コーディネイターを生み出し、SEED仮説を世に放ったターミナルは、新たな救世主を生み出すべくスーパーコーディネイター計画に

期待を寄せた。その唯一の成功例がキラ・ヤマトであり、なんと成功例に限りなく近い存在こそがラクス・クラインとアスラン・ザラだったらしい。

なにそれ、という感じだが、この世界ではそうなのだど割り切るのが建設的だろう。

一族が「イレギュラー13」としてA（エース）にキラを、Q（クイーン）にラクスを警戒していたのは、そのあたりとも関係があるようだ。

なお、NOS開発後に俺ことユウナ・ロマ・セイランがK（キング）としてマークされていた。原作のKは不明のまま一族は壊滅している。だからこそ逆に原作のKが誰だったのか気になる部分もあるが……まあ、それはそれ、としておこう。

今現在、マルキオ導師はターミナルの最高幹部に近い立場にある。もつとも、ターミナルはZAF T的な組織構成——というよりこの世界のZAF Tの原形がターミナルである可能性がそこそこある——であり、「幹部」扱いの一部が指導者、他は全員横並びというおかしな組織構成を持っている。そのためマルキオ導師をトップと見るのは間違っているわけだが、それでも今現在、最も強い影響力を保持しているのが導師なのだから、今後は最高幹部ということにしておこう。

そんなマルキオ導師は、かなり焦っている。

基盤となるターミナルそのものが壊滅状態なのだ。おまけに救世主候補のキラ・ヤマトがスーパーコーディネイターの片鱗を見せないまま野に埋もれようとしている。だがラクスとアスランはプラント限定で救世主坂（メシアざか）を登り始めているところだ。

「そうになると、あの面会は俺の目をキラ・ヤマトに向けるためのもの……か？」

たとえば俺に原作知識が無かった場合、キラはパイロットとして確保したい逸材だと思うだろう。おまけに今の俺にはキラにパイロットを強要できるだけの地位と立場がある。

キラが軍事に絡む形で宇宙に出ればラクスやアスランに絡む機会

も増える。

救世主坂ならぬ英雄坂（ヒーローざか）に入るわけだ。

それがマルキオ導師の希望？

だが種死での隠遁生活をマルキオ導師は許容して……いや、違うな。

頑種の停戦は次なる戦いの序曲にすぎなかった。ナチュラルⅡコーデイネイター間の問題が解決していないのだから、いずれ二度目の大戦が起きることは誰もが予想できたところだ。

そこに来てへアークエンジェルは改修を受けていたし、ヘフリーダムへの保全も行われていた。つまり、再びキラが戦場に出ると想定されていたのだ。だからこそヘストライクフリーダムも開発されていたし、キラもラクスもマルキオ導師が運営する施設に身を寄せていた……

恐いな。ターミナルのやつら、どこまで先のことを読んでる？

電子精霊網には、今のところターミナルの新たな動きは引つかかかっていない。だが、電子精霊網も万能ではない。完全に電気を落とされてしまえば電子精霊は生きていけず、バッテリーに避難するしかない。そしてバッテリーを放棄されれば、元の電子機器に戻ることはできない……

まさか、その対応策に気付いた？ ありえない、とは言いい切れない。

今後は警戒を高めておこう。

警戒を高めると言えば、地球連合軍とZ A F Tの今後だ。

オペレーション・スピットブレイクによって地球連合軍もZ A F Tも大打撃を被っている。ラウ・ル・クルーゼの介入が無かったことで、ブルーコスモスと大西洋連邦軍は幹部級の多くがアラスカ撤退中に捕捉されて戦死。ここでムルタ・アズラエル等も沈むと良かったのだが、さすがに最上級幹部は逃げ出していたので今後の展開が読みづらくなってしまう。

つまるところ、原作ではムルタ・アズラエルの独断に近い形で進められたオーブ解放作戦が実施されない可能性が出てきたのだ。

おそらくZ A F Tは、オペレーション・スピットブレイクにおける

地上戦力の過剰な喪失に危機感を覚え、原作通り、パナマ攻略戦を矢継ぎ早に発動するものと思われる。そうなるとマスドライバーを失った地球連合軍に残された選択肢はふたつだ。

ジブラルタルを奪還するか、

オーブを従属させるか。

冷静に考えれば前者を選ぶはずだ。なにしろZ A F Tは度重なる大規模作戦で疲弊している。そのうえジブラルタルはユーラシア連邦にとって目の上のたんこぶだった場所。アフリカ戦線に楔を打ち込む意味でも、ジブラルタル基地と同マスドライバーの奪還は当然とすべき選択肢になる。

対してオーブは今更敵対する意味が薄い。そもそもN O S開発国にして独自の量産型M Sを配備している中立国だ。しかも、この世界ではZ A F Tに宣戦布告している。敵の敵は味方と言える以上、今後軍事技術の取引相手になりえるオーブを攻めるなど、ありえない話だ。

だが……絶対には言い切れない。

原作からして、地球連合軍のオーブ侵攻はムルタ・アズラエルの独断によるもの。個人の思惑で戦略が左右されるあたり、地球連合軍の、いや大西洋連邦軍の腐りっぷりは呆れるしかないレベルにある。

だが、この世界ではN O Sの絡みで、原作以上にオーブの位置づけが強化されている。

さすがに軍部も止めるのでは？

それとも、ムルタ・アズラエルがオーブに固執し、強引に事を進めるのか？

読みづらいところだ。

まー、後々のことも考え、用意だけはしておくでしょう……………

>>> S I D E E N D

>>> C E 7 1 . 0 6 . 0 2 本島@オーブ/ユウナ・ロマ・セイラ
ン

残念ながら、固執したようだ。

「——というわけで、ポルタ・パナマを失った地球連合はユーラシア連邦と東アジア共和国がビクトリア奪還作戦に、大西洋連邦はオーブ侵攻作戦に舵を切った模様です」

久方ぶりの本島に降り立った俺は、首長会議に出席し、現状の報告を行っていた。

俺の話を誰よりも興味深く聞いていたのは、意外なことにウズミ代表首長だった。

「では先日から始まった地球連合の『ワン・アース』アピールは、その一環だと?」
「でしようね」

「……諸君。大西洋連邦領事館から非公式にこんな通達が届いている」

ウズミが示したのは連合加入を求める通達文だ。しかも、これに反発することは地球人類の秩序に抵抗する敵対行為そのものであり、あらゆる手段で正義を正すことになるだろう、なんていう恫喝まで入っている。

つまり、ムルタ・アズラエルはオーブに固執したのだ。

やっぱりなあ。

原作でも大西洋連邦のオーブ解放作戦は首を傾げるしかない軍事行動だ。いくらマスドライバーが必要だとしても、オーブを軍事占領するメリットよりデメリットのほうが大きい。だから作中でも地球連合軍高官は反対したが、ムルタ・アズラエルがこれを強行した。それはなぜか。

おそらくだが原作では、この期におよんで中立宣言なんてキレイごとをぬかしているオーブが腹立たしくて仕方がなかったのだろう。さらにサハク姉弟を通じて得た情報から、オーブの軍備が畏れるに足らずと判断できたためだと思われる。

ではこの世界ではどうか。

動機は近い。というか、プラントに宣戦布告したくせに行動を起こしておらず、さらには自分にも味方しようとしないう点が余計頭

にきているようだ。また、ヘアストレイアを過小評価している傾向もある。

オーブ軍はこの時点で地上でも宇宙でもまともな戦闘を経験していない。一応、ニアミス程度のこととは宇宙で何度もあったが、ヘフリーダムによる不殺バーストとか、守りを固めたアミノミハシラの引き籠もり砲撃とかで応戦したので、ヘアストレイアの性能が今ひとつ知れ渡っていないのは事実だ。

一方、ヘストライクダガーは、負けたとはいえパナマ攻略戦でZAFのMSと互角の戦いを繰り広げている。そのうえソキウスを乗せた後期GAT-Xシリーズは十分な成果を出している。

あと、戦後のオーブ統治を交換条件に、ロンド・ミナ・サハクがオーブの様々な機密情報を開示した上に、統合兵装ストライカーパックを搭載したヘゴールドフレームでパナマ攻略戦にも参加、オーブ解放作戦にも参戦する意志を表明している。

このことからムルタ・アズラエルも強気になったようだが……残念だったな。そうした情報、電子精霊網で全て筒抜けなんだ。

無論、首長会議の場で明かせるのは監視衛星の挙動に関する情報ぐらいだ。しかし、これと「ジョン・ドウ対策に俺が組んだ（ことになっている）電脳網監視システム」による民間企業の軍需物資の傾向とを照らしあわせれば、地球連合の大規模な軍事行動は実施前に把握可能になってしまいうわけで。

「ユウナ宇宙軍司令長官」

と、ウズミが声をあげてきた。

「地球連合軍は……いや、大西洋連邦軍は、オーブに攻めてくるのだから？」

「ビクトリアを攻めるなら東海岸に軍備が偏ります。ところが、艦艇の類は西海岸に集められています。一方、東アジア共和国の遠征軍はユーラシア連邦領を経由して地中海に移動中です。確か東アジア共和国はユーラシア連邦に借りがあるとか……」

俺の言葉に、爺様が頷いた。

「量産型MSの関係じゃな」

原作と異なり、この世界ではヘストライクダガーとほぼ同じタイミングでユーラシア連邦製量産型MS「ペリオン」が誕生している。原作でいう「ハイペリオンG」、担当者が安直だったのか「ハイペリオン」(Hyperion)の「ハイ(Hy)」を「ハイ(High)」と引っかけたらしく、これを除いた名称を量産機に付けたようだ。

この「ペリオン」、ぶつちやけると前面にのみモノフェーズ光波防御シールド「アルミューレ・リユミエール」を展開できる「ハイペリオン」だといえ、ほぼ間違いない。ALシールドはウイングダイバーの2基と両腕の2基のみ。またウイングダイバーのビームキャノン「フォルファントリー」もオミット、まともな武装がビームサブマシンガン「ザスタバ・ステイグマト」ぐらいしかないという微妙な機体に仕上がっている。

それでもコストはヘストライクダガーと同等だそう。また汎用性と機動性では劣るものの、ALシールドを標準装備していることからくる防御性の高さはヘストライクダガーの比ではないらしい。

そして月面以外の宇宙拠点を失ったユーラシア連邦と東アジア共和国にとってみれば、拠点防衛に優れた「ペリオン」の方がヘストライクダガーより有用だ。ゆえに東アジア共和国がそのライセンス生産許諾を対価に、今回はユーラシア連邦に味方したようだ。

原作では、どうだったのだろうか？

おそらく原作では地球連合軍全体の量産型MSがヘストライクダガーになり、それに対する反発があったのではないかと推測できる。もつとも、それ以前の問題としてオーブを攻めるよりビクトリアを攻めた方が妥当である、という判断も関係していたと思うが。

「どうしてオーブに……」

「だが実際に……」

「なにを恐れる！ 今のオーブは……」

「だが戦争となると……」

あーだこーだと首長会議は続いたが、結論は理念の通り、「侵略は許さず」で連合加盟は拒否。また、なんでも赤道連合とスカンジナビア共和国も同様に恐喝を受けているらしいので、「アストレイア」の輸

出とライセンス生産を求められた際に許可する方針が定められた。

「意外かね？」

「まあ、多少は」

会議のあと、ウズミと共にある場所に向かう間、ヘアストレイアの輸出とライセンス生産を率先して、あのウズミが認めたということに驚いていたことを俺は素直に認めることにした。

「君のお爺さんに発破をかけられたんだよ」

「爺様に？」

「ああ。さすがは再構築戦争を肌で知っている世代だ。中立とは孤立にすぎない。不戦平和の理想を掲げた日本が今どうなっているか。その史実を忘れるな。そう言われてしまつてな。目から鱗というのは、まさにこのことだった」

驚いた。いやー、驚いた、驚いた。

あのウズミが「キレイなウズミ」になつてる！

「それに、君のこともいろいろと考えた」

「……俺のことを？」

「想像した、というのが正しいかな」

ウズミは前を向いたまま苦笑を漏らした。

「常人を遙かに上回る知性に恵まれた幼児。コーデイナーが優秀さゆえに敬遠されるところを見てきた幼児が、なにを思い、どう振る舞うか。……今ならわかる。君の選択は正しい。君の才能は誰にも知られぬまま埋もれていた方が良かった。君自身が人並みの幸せを得るには、それ以外の選択肢はなかった」

あれ〜？　なんかこの人、勘違いしてるぞ〜？

「だが国難に堪えきれず才能を発露してしまった。そして今の君がいる」

目的地が見えたところで、ウズミは立ち止まり、隣りを歩いていた俺に目を向けてきた。

「すまない」

「……謝られる理由がわかりません」

「そうだな」

ウズミが苦笑する。

「だが、約束させてもらおう。私の目が黒い間は、君の頭脳を国家に束縛しないと約束する。今の役職も今次大戦が終結し次第、いつでも退けるように手配しておく」

……ああ、なんてこった。

原作の視聴者だった頃には「なんて最凶指導者様だ!」とかなじれたというのに。

これか。これが、オーブの獅子。

俺でさえ、今、目頭が熱くなりかけた。

理屈を超えたカリスマ性。

なるほど、これか。

これじゃあ、国民も喜んで、あの展開を受け入れるわ。

「代表首長」

「うむ」

「戦後ですが——木星圏開発をやらせてもらいます」

「木星?」

「聞いているかもしれませんが、MSに搭載可能な核融合炉の開発を進めています。今はまだ実用化に不向きですが、いずれは燃料となるヘリウム3さえあれば、地球圏のエネルギーを一切合切、どうとでもできるレベルになります」

「……ヘリウム3か」

「はい」

「それを木星で?」

「ついでに有機化合物も。化石燃料に頼り切るには問題もあるので」

「資源庫としての木星……まさか、そこにコロニーを?」

「はい」

「そうか。わかった。オーブからも切り離れた組織が必要だな」

「最終的には独立組織を築くつもりです。何十年、いえ百年先になるでしょうが」

「娘がもう少し成長すれば安心できるのだが……わかった。できるだけのことはしよう」

「ありがとうございます」

口頭ながら、ここに密約がかわされた。

じゃあ、アレのお披露目というか。

「では、オーブ軍より依頼された〈アカツキ〉ですが——」
ぶっちゃけると、トンデモ仕様です。どうもありがとうございます

〽SIDE END

第9話 蹂躪ですか。そうですか

>>>CE71.06.15 本島@オーブ／OTHER

CE71年6月13日。原作同様、この世界においても大西洋連邦軍第4洋上艦隊が南下。オーブに対し、ウズミ・ナラ・アスハ代表首長の解任と議会の即時解散、武力放棄と査察受け入れを要求。回答に48時間の猶予を与えろという、事実上の宣戦布告を行った。

オーブ首長会議は即座にこれを拒否。だが大西洋連邦海軍は猶予時間まで動かず、その間にオーブ軍は臨戦態勢に移行した。

斯くしてCE71年6月15日。ついに大西洋連邦軍第4洋上艦隊はオーブ連合首長国の排他的経済水域に侵入。オーブ解放作戦を実施に移すと共に、後世、オーブ防衛戦と呼ばれることになる戦いが幕を上げることになった。

>>>SIDE END

>>>CE71.06.15 本島近海@オーブ／カガリ・ユラ・アスハ

へいいな、カガリ。おまえの役目は標的と砲台だ。一定距離に近づいた敵を、とにかく撃ちまくれ。それでどうにかなる」
「わかってる！。 何度も言うな！」

パイロットスーツどころか、式典で身につけるドレスにティアラまで付けている私は、球状の内面全てに外部の映像が映しだされている操縦席——全天周囲モニター・リニアシートと言うらしい——に収まったまま、両手をレバー、両足をフットペダルにそつと添えただけにした上で、首の後ろに付けたニューロリンカーを経由して視覚神経に送り込まれる様々な情報に目を走らせていった。

<<<ORB-01 アカツキ>

今、私が搭乗しているのは、オーブ軍のフラグシップとして作られたMSだ。見た目はヘストライク<に近いが、全身が熱光学兵器を放射する黄金の装甲に覆われ、背中には両肩上和両脇下から四門のプラ

ズマ収束ビーム砲が突き出ている。また環状のデュートリオンビーム受光器兼モノフェーズ球状光波防御シールド装置を背負い、両手に高エネルギービームライフルを持った上で空を飛んでいるという常識をあげ笑うかのようなMSだった。

製作者は、あの「哲学者」ユウナ・ロマ・セイラン。

今現在の通信相手もそう。

それに許嫁でもある。だが、父様は破談にすると行っていた。なんでもユウナは、今の戦争が終わったあとは木星の開発事業に関わり、オーブを離れるのでアスハ家の跡取りである私の婿にするわけにいかないんだとか……

それもそうだと、今なら納得できる。

ユウナは天才だ。それも歴史に名を残すような、途方もない天才だ。ただ、あまりにも天才すぎて、ずっと自分の才能を隠してきた。コーディネイターとナチュラルの確執が戦争にまで発展した現状を思えば、仕方のないことだと思う。

もしオーブが平和なままなら、きつとユウナは「哲学者」と馬鹿にされたままでいただろう。ユウナ自身、それを望んでいたと思う。でも、そうもいけなくなつた。

G事件。機械相の独断でモルゲンレーテ社と大西洋連邦軍とのMS共同開発を進めたという事件。そのせいでオーブは、資源小惑星コロニー「ヘリオポリス」を失うことになった。ユウナも、オーブが国難に見舞われることをそれで察したんだと思う。

だからユウナは「ヘアストレイ」、いや「ヘアストレイア」の開発に手を出した。

自分の秘密がバレてしまうことも厭わず。

自分の才能というパンドラの箱を開けることも厭わず。

……水くさいと思う。でも、わかる気もする。

私も小さい頃から、自分の身体能力の高さに後ろめたさを覚えていた。アスハ家の跡取り娘という立場もそうだ。養女なのに、自分はこんなにも身体能力が優れていて、オーブの王族に等しいアスハ家の跡取りであることが決まっ……

G事件を知り、後先も考えず、ヘリオポリスに向かったのはそれがあつたからだ。

この目で見えたかったのだ。

父様は直接関係していなかったというが、代表首長である父様が本当に何も知らなかったとは思えない。きつと知っていながら、政治的判断で見逃していたはずだ。そうやって手に入れた軍事力で本当にオーブの平和が守れるのか……そう思えなかったからこそ、私はこの目でG兵器を見て、確かめたかった。

結果、あの災厄に巻き込まれた。

キサカのおかげで無事、本土に戻れたけど……そこで私は父様を詰った。

父様は、私が世間知らずだと逆に叱った。

だから世界を知ろうとした。

向かった先は、今の地球で最も困窮しているとされた北アフリカだ。

そこで現実を知った。

耐えきれなくなった私は、レジスタンスに加わった。

キサカには止められたが自制できなかった。

それからいろいろあつて、〈エアークエンジェル〉と再会し、一緒にオーブに戻ることになった私だったが……思い知らされたのは自分の小ささばかりだった。

だからこそ私は、それからというもの、苦手とした座学も頑張つて受けた。

父様やユウナの御爺様に随行して外交の場も見学させてもらった。

自分の無知ぶり、小ささをさらに思い知らされる毎日だった。

そんな私に、新しい役目が言い渡されたのは少し前のことだ。

——カガリ。戦争の象徴として人を殺す覚悟はあるか？

父様のその言葉に、一瞬言葉に詰まったが、私はしつかり頷き返した。

こうして私は〈ヘアカツキ〉の正規パイロットに選ばれた。

推薦者がユウナだと知ったのは、その後だ。

——オーブのフラグシップだから、乗るならカガリしかないだろ。

簡単にそう言いかけたユウナは、シミュレーターによる訓練に付き合ってくれた。そこで初めて、ユウナがMSパイロットとしても優秀であることを知った。

——MSは頭で動かす兵器だからな。生身の格闘より楽なのは当然だ。

少しだけ笑えたのは、元へアークエンジェルへのフラガ大尉……いや、今はフラガ一佐か。彼にへアストレイアの实機による模擬戦を挑まれ、僅差で負けた時のことだ。

——てめえ、わざと負けたる！

——んなわけあるかあ！ あの乳を好き勝手してるてめえをボコる好機だったのに！

——はあ!? セイラとかいうへアークエンジェルへの新艦長こましてんのでめえだろ！

——て、てめえ！ 言っつていいことと悪いことがあんだろ!!

——ああん!? だったらやんのか!?

——やってやんよー!!

二回戦。ユウナの突撃↓乱舞で模擬戦終了。

なんでも独自の格闘パターンを組んでいたらしい。超軽量のへアストレイアは格闘戦に不向きなため、それを見越したへアストレイアによる対へアストレイア格闘撃破用パターン、なんていうニツチなものを作るユウナは、ある意味、へアストレイア同士の模擬戦では無敵かもしれない。

——どや！

——開発者だからって、使えるように使えん穴を見つけるのは得意らしいな！

——あーっはははは！ なんとでも言え、この負け犬！

——ちくしょー！

——ムウウウウウウ！

その模擬戦は、イズモ級改修案で地上に降りてきていたマリユール。

ラミアス技術一佐がフラガ一佐を殴り倒したことで決着した。あのラミアス艦長が、ユウナに何度も頭を下げている場面は、私にとつては少し衝撃的だったのは秘密だ。

そういえばあの二人、今月下旬には結婚するらしい。

来月にはムウ・ラミアス一佐とマリユール・ラミアス技術一佐になるんだとか。

——フラガなんて家名、残す価値が無いんでね。

ラウ・ル・クルーゼの絶望宣言を思えば、そういう結論になるも仕方ないと思う……

〈そろそろだな〉

ユウナの声で私はハツとなり、敵との距離が近づいてきたことに気が付いた。

〈いいな、おまえの役目は標的と砲台。一定距離に近づいた敵を、とにかく撃ちまくれ。まちがっても突撃するなよ〉

「わかってる！ 何度も何度も何度も言われたことだ！」

〈それでも不安なんだよ、おまえに関しては。過去の自分のバカさつぷりを呪うんだな〉

ぐっ……否定できない。

〈第一陣の攻撃開始まで残り5秒前……3、2、1ッ〉

〽〽〽SIDE END

〽〽〽CE71.06.15 本島@オーブ／OTHER

オーブ防衛戦——それはオーブの力を世界に見せ付けるショーそのものだった。

戦闘そのものは、大西洋連邦軍の航空戦闘機とオーブ本土防衛軍の〈アストレイア〉の激突から幕をあげている。だが、最新鋭機でもヘスカイグラスパーに頼らざるをえない大西洋連邦軍と、魔改造の果てに超軽量化&ジェット推進化がなされている〈アストレイア〉が多数配備されているオーブ軍では軽自動車と戦車ぐらいの違いがある。

初端のミサイル合戦こそ互角だったが、ドックファイトではあつけ

なくオーブ軍が勝利。

その後も、大西洋連邦軍は空母の甲板に「ヘストライクダガー」を出して応戦するものの、実は主武装であるM703 57mmビームライフルでは「ヘアストレイア」を撃破できない。そもそも「ヘアストレイア」にはユウナ謹製の優秀な対レーザー／ビームセンサーがついているため、見てから回避余裕でした、なんて状況が当たり前だったりする。

すべてはユウナ・ロマ・セイランが生み出したVR訓練技術のためものだ。

現実と遜色のないVR訓練において、オーブ将兵はすでに膨大な数のZAF T軍とのありとあらゆる状況の戦闘訓練すら行っている。またオーブ軍用パイロットスーツにはニューロリンカーの機能を一部搭載。これを用いたAR（拡張現実）による情報支援と物理的な脳神経系補助のおかげで、今ではオーブ軍兵士の全員がZAF Tの赤服に匹敵する実力を備えるまでになっている。

なお、リンカー系技術はコーディネイターよりナチュラルの方が総じて適正が高い。これはコーディネイターの脳神経系が最初から強化されているおかげで、逆に過敏に反応してしまい、リンカー系技術との同調を拒絶しやすいために起きた現象だ。

結果、オーブ軍内部でのナチュラルとコーディネイターの能力格差はなくなりつつある。この事実は後に調査結果がまとめられ、廉価版ニューロリンカーが個人用端末として爆発的に売れていくことになる。また、このことがこの世界の在り様を一変させていくのだが、それはまた別の話だ。今はオーブ防衛戦の顛末についてのみ見ていくことにしよう。

戦闘開始から七分後、大西洋連邦軍は三機のガンダムタイプを投入した。

〈GAT-X131 カラミティ〉

〈GAT-X252 フォビドゥン〉

〈GAT-X370 レイダー〉

アズラエル財団傘下の国防連合企業体が前期GAT-Xシリーズ

のデータを基に開発した、いわゆる後期G A T—Xシリーズたちだ。改良型P S装甲であるT P（トランスフェイズ）装甲を採用した大西洋連邦軍の切り札にも等しい戦力である。

パイロットは当初、ブーステッドマンと呼ばれる『投薬・特殊訓練・心理操作によりコーデイネイター以上の身体能力を持たせた実験兵士』が予定されていたが、ジョン・ドウ暴露事件によって実験兵士計画そのものが頓挫してしまった今、その手が使えない。そのため、今はソキウスと呼ばれる特殊な戦闘用コーデイネイターたちが乗っている。

さらに旗艦の甲板から黒地に金があしらわれた「アストレイア」系のMSが飛び立った。

＜M B F—P O I—S P アストレイ ゴールドフレームS P＞。

端的に言えば「ストライク」用のI. W. S. P.（統合兵装ストライカーパック）を強引に装備した「ゴールドフレーム」である。部分的にG A T—Xシリーズの技術で補強しているため性能は向上しているが、防御力の低さは変わらず、むしろ極端な加速性等によりまともが人間には扱いきれないピーキーな機体になってしまった。

だが、一人で無理なことも、この二人でなら不可能ではない。

「今までの苦渋、百倍、千倍、万倍にして返すぞ！」

「ギナ！ 出すぎるな！」

「ゴールドフレームS P」のコックピットは複座型だった。

操縦担当のメインパイロットはロンド・ギナ・サハク。

火器管制担当のサブパイロットはロンド・ミナ・サハク。

強奪した「アストレイゴールドフレーム」を取引材料とし、ムルタ・アズラエルと合流するしかなかった国際指名手配犯のサハク兄弟だ。もはや彼らにしてみれば、この戦いで活躍したうえで勝利をおさめねば、身の破滅を待つだけという状況にまでおいやられているのだ……。だが、そんな兄弟を待ち受けている現実という名の壁は、とてつもなく高く、厚かった。

「スワロウ1より本部。『黒狐』を発見。繰り返す、『黒狐』を発見」
「本部よりスワロウ1。接敵せず任務を継続せよ」

〈スワロウ1より本部。任務を継続する。対応部隊に健闘を祈ると伝えてほしい〉

敵の陣容は、すでに全てが知られていたのだ。

〈本部よりハンター1。黒狐を発見。キツネ狩りの時間だ〉

〈ハンター1より本部。了解した、これよりキツネ狩りを開始する〉

猛然と〈アストレイア〉部隊が三機のGと〈ゴールドフレームSP〉に襲い掛かった。

〈なに!?!〉

〈ちっ、連携が……〉

〈〈評価修正。オーブ軍の連携練度は極めて高いものと推察〉〉

魔改造された〈アストレイア〉は、量産機でありながらも〈ストライク〉に匹敵する性能を保持している。そのうえ、パイロットたちはVR訓練を積み重ねてきたスペシャリストたちだ。

いかに Rond 兄弟とソキウスが優秀だとしても、自分より優れたパイロットが乗る機体を相手にした訓練を積んできた者たちと、自分に劣るパイロットや機体との戦闘しか経験していないコーデイネイターたちとでは、どちらに分があるか、最初からわかりきっているようなものだ。

それでも戦いが膠着状態に陥るあたり、Rond 兄弟とソキウスたちも決して無能とは言い切れないところがある。逆に、彼らに対して、一機たりとも小破すら出さずにすんでいるオーブ軍の練度もかなりのものと断言していいだろう。

しかし、それを一変させる決戦兵器が、オーブには控えていた。

〈そーら、いい距離だ。ちゃんんとロックオンしてから撃てよ?〉

「威嚇射撃なしでいいんだな?」

〈必要ないだろ。もう交戦中だ〉

「わかった。——カガリ・ユラ・アスハより総員に通達! これより天の鉄槌を下す! 繰り返す! これよりアカツキによる天の鉄槌を下す!!」

その機体を大西洋連邦軍が認識したのは、ちょうどその時だった。「新型です! オーブの新型がこちらに近づいています!」

旗艦の艦橋に詰める通信士が律儀に大声で報告していた。

だが、その声は他の奇声で部分的に上塗りされてしまう。

「なぜだなぜだなぜだ！　なぜこうなる！　どうしてこうなるんだああああ！」

この場でただひとり、軍服ではなくスーツを身に着けてた金髪の青年——ブルーコスモス盟主にしてアズラエル財団の会長、ムルタ・アズラエルは、頭をかきむしりながら、そう叫んでいた。

ここまで一方的な戦いにはならないはずだったのだ。

ロンド兄弟がもたらした情報から、オーブの量産型MSが防御性能を捨てて運動性と機動性を高めた機体であることは把握していた。飛行できるように改良されたとしても、戦闘機と比較にならない遅さで空を飛べる程度であり、その程度の兵器であれば艦隊の対空砲火と既存戦闘機の飽和攻撃で一掃できる計算だったのだ。

だが、蓋を開けてみればどうだ。

ミサイルというミサイルは迎撃され、戦闘機の機関砲は関節部でさえはじいてしまい、艦船の砲撃は磁石の反発力でも使っているかのようにならぬと避けていく。それでいて射程の長いビームライフルでこちらは大損害を受けている。

海上だけではない。電波が使えないせいで精度が落ちたとはいえ、画像解析方式を主とすることでそれなりの性能が期待されていたイージス艦が、海中からの攻撃によって次々と沈んでいる。オーブは海洋国家のくせに潜水艦をたいして保持していなかった以上、すでに発表されている量産型MSの水中用を練り出していると考えられるが、戦闘開始直前まで見つけられないほどの隠匿性を持っているなど予想外だ。

「どうして！　どうして！　どうしてどうしてどうして!!」

アズラエルは錯乱一歩手前だった。そんな彼を一瞥した艦隊司令は舌打ちをすると、通信士に顔を近づけた。

「報告を復唱！　新型と聞こえたが!？」

「はっ！　0時、1キロにオーブの新型を確認！　こちらに——」
その時だった。

「——これをオーブの意思と知れ！ アカツキ、フルバースト!!」

六条の閃光が大西洋連邦軍艦隊に襲い掛かった。

その一撃で巡洋艦1隻、駆逐艦3隻が大破。空母1隻が中破。空母1隻が甲板上のMSを破壊され、被害を出してしまった。

アズラエルが叫んだ。

「な、なんだ今のは?」

「映像出ます!」

間髪入れず、モニターのひとつに観測映像が出力される。

そこに映し出されたのは黄金のガンダムタイプだった。

両肩の上と両脇の下から砲門を突き出し、両手にも大ぶりのライフルを構えている。背中には環状の不可思議な装置を背負い、今はそれが発光しながら、さらに大きな三重の黄金の円を展開していた。

「なんだ、あれは……」

「オーブの新型……」

「冗談だろ……」

MSの火力ではない。実際にはデュートリオンビーム受光器兼モノフェーズ球状光波防御膜装置「ヤタノカガミ」が本土からデュートリオンビームによるエネルギー供給を受けているからこそその大火力なのだが、そこまでのことは彼らにもわからなかった。

「つ、通信が! あの新型から全周波数に向けて通信が流されています!」

通信士が叫んだ。

「つなげ!」

「はっ!」

艦隊司令の命令で即座に通信画面が表示される。そこには、黄金のティアアラを頭に被り、純白のドレスに紫色の肩帯をかけた美しい少女のバストショットが映し出されている。あまりにも場違いな映像に、艦隊司令は一瞬、通信士をにらみつけたが、通信士は首を小さくふることで間違いではないことを主張した。

「繰り返す! 私はオーブ連合首長国本土防衛軍將軍、カガリ・ユラ・アスハである!」

アスハ——その名乗りだけで、彼女の立場は誰もが理解した。
オーブの王族、アスハ家の令嬢。

正真正銘のプリンセス。戦場に居てはならない種類の人物だ。
へ大西洋連合軍を名乗る無知蒙昧な侵略者よ！ 我が国が狼を恐れるだけの羊とでも思ったか！ これ以上の進軍、我が国の叡智と技術と努力の結晶であるオーブの剣、このへアカツキと我が軍が許さぬと心得ろ！

再び大西洋連合軍を襲い掛かる六条の破滅の光。

……もはや、戦いは決した。

二度目のフルバーストと共に、ムルタ・アズラエルが逃げ出したのだ。

自分が乗り込むへスカイグラスパーを三機のG——というより主にへフオビドゥンに——とへゴールドフレイムSPに守らせながらアズラエルが戦場を離脱。ほぼ同時に大西洋連邦軍が降伏の意思を表明。全艦艇が主機を止めだしたことでオーブ軍も追撃できず、アズラエルとガンダムタイプ三機を見逃すことになってしまった。

だが、戦闘そのものはこれで終了した。オーブは守られたのだ。

「……本当に、守れたのか？」

へさあな

「おい」

へとにかく戻れ。あと、医者のカウンセリングとか受けとけ

「そこまで軟弱じゃない。人殺しは……もう、経験済みだ」

いずれにせよ、こうして世界はオーブの剣を知ることになった。

地上においてはへアカツキ、

宇宙においてはへフリーダム、

そして高い汎用性を誇るへアストレイアと高い練度を誇るオーブ軍兵士たち。

原作と大きくかけ離れたこの世界において、オーブ連合首長国は少数精鋭の守勢的軍隊ながらも、世界最強の軍事力を持つ国であると強く印象付けられることになったのだ。

＜＜SIDE END

>>CE71. 06. 25 アメノミハシラ／ユウナ・ロマ・セイラン

戦後処理も終わったのでアメノミハシラに帰ってきた。

「で、これなわけか」

「そうね。これなわけ」

帰ってきた俺を待ち受けていたのはセイラが取りまとめておいた諸々の新規情報だった。

ぶっちゃけると、オーブ防衛戦の3日後に始まった第三次ビクトリア攻防戦の顛末だ。

結論を言えば、原作通りに地球連合軍側が勝利した。ZAFは最後の最後で自爆装置を作動したようだが、原作同様、特殊部隊の突入によりこれを阻止。地球連合軍はようやく宇宙に上がる手段を取り戻すに至ったというわけだ。

ただ、原作と大きく異なる点がいくつもある。

まず地球連合軍の主力が〈ヘダガー〉ではなく〈ペリオン〉だったという点だ。

そもそも第三次ビクトリア攻防戦はユーラシア連邦が主となって行われている。そのため主力として〈ハイペリオン〉の量産型である〈ペリオン〉が使われたのだが、これが大活躍してしまい、アズラエル財団の面目は地の底まで叩き落とされる結果となっている。

また、オーブに攻めてきていたせいで、原作ではこっちで活躍したロンド兄弟が出陣していなかった。

おかげで、すでに地球連合軍では全軍の主力を〈ペリオン〉系にしようという話が持ち上がっており、今後を見据えた宇宙戦用の改修機が大量生産に入っている。どうせ動体視力も反射神経もナチュラルはコーディネイターに及ばない。それならば機動性より防御性を強化し、移動砲台としてMSを運用する。という考え方が主流になりつつあるというわけだ。

まあ、オーブ防衛戦での〈アカツキ〉のフルバーストが地球連合軍

全体にアカツキショックと呼べそうなものをもたらした可能性も高いのだが。つか、それならMSである必要性がないような気も……一方、オーブは真逆をいつている。

身体機能の差による加速度耐性の問題こそ残っているが、リンカー技術によりナチュラルもコーディネイターも同等の反応速度を示せるようになったオーブ軍では、鹵獲した「ダガー」の高い量産性と整備性——地味に「アストレイア」より上だった。悔しい——に着目し、次世代量産機計画を今の時点から検討に入っている。

だったら、「ウインダム」だ。

個人的に「ウインダム」は全ガンダム系作品の量産機の中でも上位に位置するかっこよさを誇っていると思う。原作上のスペックは「ヘストライク」と同等、種死時代の「ザクウオーリア」より少し劣るという程度だが、「アストレイア」に施した技術を用いれば、次世代どころの話ではない性能になるはずだ。

それに、拡張性も「ジェガン」並みに確保できる可能性が高い。戦後を見据えれば、これほどふさわしい機体もないだろう。いずれ起きる軍縮においては新規開発より拡張改良のほうが優位に立てる。地球連合とプラントの量産機がどうなるかわからないが、「ムラサメ」よりは発展性もある。

可変型はロマンだが、整備性や生産性が……

「それで、今後はどうするつもり？」とセイラ。

「どうするって……静観だけど？」

「戦争じゃなくて」

「ああ、こつちか。もう戦闘もないだろうから、ヘリオポリスとアルテミス……L3の再興がメイン、かな？」

だつてさ。もう、あれこれと仕掛けを施した後だし。

ジェネシス？

第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦？

平気、平気。仕込みはもう、終わってるから。

>>>SIDE END

第10話 終了ですか。そうですね

>>>CE71.08.01 L3/ユウナ・ロマ・セイラン

艦橋の正面スクリーンには調印式典の様子が映し出されていた。

ユニウス条約の締結。

南アフリカ統一機構の首都ナイロビで行われ地球連合とプラントの停戦協議は「ナイロビ講和会議」と呼ばれていたものの、最終的にはスカンジナビア王国外相リンデマンが提案をした「お互いの国力に応じた軍事制限」を基本とする「リンデマン・プラン」を採用、今次大戦における最大の悲劇とされる「血のバレンタイン事件」を地球連合も認めたことから、最終的に「ユニウス条約」という名前で停戦が締結されることになった。

とはいえ、原作に比べると今の時点でのナチュラルとコーディネイターの種族間問題は和らいでいるのが実情だ。

原因は民生用ニューロリンカーことナーヴギアの普及と関係している。

オーブ防衛戦で有用性が実証されたリンカー技術は、セイラン家とアスハ家が共同出資した新企業『アーガス』により一般市場にも開放された。ついでに俺がシステム開発を請け負う形で『ソードアート・オンライン』を実用化。ただしアバター変更は不可、ナーヴギアも最初からアミューシアと同程度のデスゲーム不可な仕様にしたため、『SAO』シリーズのような問題は極力つぶしてある。

で。

これに伴い、リンカー技術の同調率が遺伝子強化されたコーディネイターほど低下することが発表された。また、今なおオーブの独占技術としてあるニューロリンカーによる脳神経系補助を行うと人によってナチュラルの方が各方面でコーディネイターを上回ることも実証済み。これにより世界中のナチュラルが自信を取り戻し、なにやらブルーコスモスの活動も沈静化しつつある今日この頃。最近はコーディネイターの過激派なんてものが現れだして、なんだかなー、と思うことが増えている昨今だ。

そうそう。

第三次ビクトリア攻防戦以降の歴史は、原作をほぼ踏襲しつつも斜め上の展開を見せてくれた。

まず原作で7月1日に起きたラクス・クラインの反乱はそのまま発生。ターミナルが暗躍し、ラクスと縁を持つキラに協力を求める通信があつたようだが、フレイとの結婚を視野に入れて家さがしすら始めているキラが応じるわけもなかった。

オーブにしても戦後処理がひと段落した6月23日の時点からL3再開発事業の開始を宣言。宇宙軍によるデブリ回収やら譲渡済みのコロニーをL4から運び出すなど、大忙しな状況だったのでプラントの内紛にかかわっている余裕など無い。

よって、この世界では三隻同盟なんてものはなかった。

7月12日、原作通りにL4のメンデル跡で「エターナル」と「ヘッドミニオン」が激突。もしかしてこれでラクス一党が退場してくれるかも……と期待したが、そうはならず、さらに原作と違う別口からアズラエル財団がNJC（ニュートロンジャマーキャンセラー）の情報を入手してしまう。

情報源は、どうやらプラント在住のローレベル・コーディネイターだった模様。

これが二次創作によくある修正力か……と戦慄したのは秘密だ。

もつとも、こっちの仕込みはすでに終わっているのです、あまり心配しなかったが。

7月16日、地球連合首脳会議において、NJC搭載型核ミサイルの開発開始と“ピースメイカー隊”の編成が極秘裏に決議される。もちろん、その現場は俺が記録しておいた。原作通りだなあ、と思いつつ俺個人のエージェントが得た情報としてオーブ本国にも通達。核兵器対策が議題にあがつたのでニュートロンスタンピーダーの可能性を示唆しておいた。これを受け、本国で研究開始。俺個人にも研究依頼が来たものの、いい加減、俺に依存した体制は好ましくないのでスルーしておいた。

8月8日、地球連合軍によるカーペンタリア攻略作戦が発動。

地球軍、カーペンタリア攻略を最終目標とするエアーズロック降下作戦を発動。砲撃戦能力を強化したヘペリオンを主力とするオーストラリア内陸部からの浸透作戦が始まり、ZAFの地上戦力はさらに追い詰められていくことになる。

また同時期からビクトリア宇宙港より続々と宇宙戦用ヘペリオンにあたるヘロングペリオンや人員・物資が月に向けて打ち上げられていく。大作戦の噂が流れだし、オーブも念のため警戒態勢をとることにした。

もつとも、オーブの心配は杞憂に終わる。

9月11日、地球連合軍司令部はプラント本国攻撃を最終目標とした「エルビス作戦」の発動を決定。これに伴い、地球連合とオーブとの休戦に向けた動きが本格化する。

9月15日、赤道連合首都シンガポールにおいて地球連合とオーブの休戦協定、通称「赤道条約」が締結される。内容は事実上、地球連合側の降伏そのもの。アズラエル財団を主とした賠償金の支払い、戦争犯罪人としてのムルタ・アズラエルおよびロンド兄弟の引き渡し、G計画成果物の全面的な引き渡し、L3宙域のオーブ独占領有承認などがなされた。

ぶつちやけ、アズラエル一派を生贄にした手打ち式そのものだ。

これに伴いヘドミニオンとヘダガー系MS機体がオーブに引き渡され、ナタル・バジルールとアーノルド・ノイマンも戦争犯罪人として引き渡されている。両名には不運としか言いようがない顛末だが、地球連合内での権力闘争の結果でもあるので納得してもらおうしかない。

また、この過剰ともいえる賠償に対し、地球連合は最新のNOSと装甲技術の提供を打診。悩みどころだったが、俺が特に気にしていないことを知った爺様がOKを出したことからこの話はあつげなくまとまることになる。

9月23日、ボアズ攻略戦。ピースメーカー隊による核攻撃でボアズが陥落する。この時、新装甲で超軽量化に成功したヘ試作型バスターペリオンが活躍。地球連合のMS運用が宇宙でも移動砲台を主

とする路線で固まることになった。

9月26日、第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦。プラント本国への核攻撃が行われるものの、ヘターナルが颯爽と登場。アスランとニコル、また本国から出撃したイザークとディアッカが乗るヘジャステイスがヘミーティアで対応したことにより核はすべて迎撃される。〈フリーダム〉無しでどうなるかと思っただが、ヘミーティア4機で対応したので、どうにかならっただけらしい。

その後、Z A F Tはヘジエネシスを使用。第1射だけで4割を撃退する。

翌27日、ヘジエネシス第2射により、補給を兼ねた地球連合軍第二陣の攻撃隊もろとも、月面のプロレマイオス基地を破壊。戦いの趨勢は決したも同然だが、ここでなにをトチ狂ったのか、パトリック・ザラはアマノミハシラに第3射を放とうとする。

ここで俺の仕掛けが牙をむく。

なんてことはない。ヘジエネシスが動作不良を起こし、自爆しながらズラした射線でヤキン・ドゥーエを薙ぎ払っただけだ。これにより本国宙域にデブリが大量発生、ヤキン・ドゥーエに詰めていた上層部は全滅。パトリック・ザラも当然死亡。プラントは混乱のつぼに叩き込まれることになった。

そこに再びヘターナルが登場。ひそかにターミナルの支援を受けつつ、ラクス・クラインが呼びかける形で全体の統制が回復する。これをきっかけとし、失墜していたクライン派が再びプラント政権を掌握する。

9月30日、プラントはラクス・クラインを首班とする新政権を発足。地球連合に対する停戦協議を正式に求める。地球連合も、これを前向きに受け止める。それというのも、この頃になるとリンカー技術の話が地球圏で広まりだしていたからだ。つまり、これを使えばナチュラルもコーデイネイターに対抗できるわけで、それがブルーコスモスの勢いをそぎ始めたというわけだ。

同日、プラント新政権はオーブにも停戦協議を持ち掛ける。

オーブIIプラント間の停戦協議は月面中立都市コペルニクスで行

われ、11月24日に「コペルニクス条約」が締結される。内容は賠償こそないがヘリオポリス崩壊の謝罪が公式に行われ、オーブのL3独占領有の承認と前期GAT-Xシリーズの引き渡しを中心となっている。他にもこまごまとあるが、まあ、気にするな。

原作では第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦後に月のファクトリーを失ったユーラシア連邦がアマノミハシラに攻めてきたが、この世界では地球連合の主導権をユーラシア連邦が握っているせいか、逆にそうしたことは起きなかった。

だが、海賊の襲撃ならたびたび起きている。

海賊に見せかけたZAFの特殊部隊や、海賊に見せかけた地球連合軍の特殊部隊が何度となくアマノミハシラを狙ってきたのだが、そのすべてをオーブ宇宙軍は退けている。ついでに海賊の一部がジャンク屋連合につながっていたので、12月の時点でオーブは実力行使に打って出た。

ジャンク屋連合に対する討伐宣言と降伏勧告だ。

もともとジャンク屋連合とはL3復興事業を通じて接触を持ち始めていた。またNOSの対価として得た旧型コロニーおよび赤道条約締結後に買いたたいた廃棄コロニーをL3に運ぶ際に長期契約を結んだジャンク屋もいる。その中に、あの悪運の強い彼もいたが、正直どうでもいいので放置してある。

んで、つきあいを持つ中でターミナルと結びついているジャンク屋が数々の非合法活動に手を染めていた事実が明らかになった。というか俺が明らかにした。その中には地球連合加盟国に対する麻薬密売などもあり、そっち方面があれこれと大騒ぎになっている。

ジャンク屋連合そのものは地球連合だけが特権を承認しているの
で、オーブからみるとただの民間組織だ。よって12月15日をもってオーブはジャンク屋連合を非合法団体に認定。ジャンク屋連合の有志を支援し、新たなNPO団体として「DSSA(デブリ・スイーパー・アソシエーション)」を設立させた。

そのうえでオーブ宇宙軍が出動。ムウ率いるMS部隊が大活躍し、
〈ジェネシスα〉を確保し、これをL3に運び込んだ。

そんなこんなで今現在もオーブはジャンク屋連合を名乗る海賊と宇宙でドンパチを続けている。その背後にいるターミナルは、情報戦チートな俺の攻撃で状況の把握すら難しくなっており、最近はプラントの直接的な強化に専念し始めた気配が濃厚だ。

大望のSEED持ちによる政権だから、だろうな。

地味にオーブはSEED持ちのカガリが次期代表首長に内定しているの、連中にしてもうかつに手を出せなかったりする。

あとは地球連合だが……ま、あとは勝手にやってくれ。

こっちはこっちで忙しいんだ。

「最終確認終了。——総長、発進準備整いました」

「そうか」

ユニウス条約調印式典を映し出していた正面スクリーンが別のものを映し出した。

再建されたヘリオポリスの映像だ。

かつてのように資源小惑星にシリンダー型コロニーが突っ込んだ形をしているが、今はそれが2基あり、資源小惑星間をつなぐフレームもろとも、全体がAL防御幕で覆われている。さらにコロニー間にもAL防御幕は張られ、そこでL1、L4、デブリ軌道から送り込まれる巨大デブリを受け止めている光景も垣間見えた。

新生ヘリオポリスは宇宙のリサイクル基地として再出発を果たしているのだ。

最終処理はオーブ本土で行い、ここではあくまで分別が主となっている。そして今後、ここは今年2月2日に発足したNPO団体、JDCこと「木星開発団（ジュピター・デイベロツパース）」の地球圏側窓口として機能する。

「じゃ、行くか」

「了解。——〈ジェネシスα〉に到達。出力上昇を確認」

スクリーンが切り替わり、第一陣の異様な船体の概念図が表示された。た。

シリンダー型コロニーそのもの。

底面にはアーム等ががちり固定された〈アークエンジェル〉の姿

がある。

〈アークエンジェル〉のALを用いたコロニー丸ごとの移動。

JD発足と共に、俺はオーブの公職をすべて退き、退職金代わりにオーブでも持て余していたG計画成果物のすべて——〈アークエンジェル〉、〈ドミニオン〉、前期および後期のGAT-Xシリーズ——の譲渡を受けていた。

〈フリーダム〉は魔法で劣化させたものを残してある。

今はムウがメインパイロットを務めているそうだが、あまりのハイスペックに、今でももてあましているとぐちっていた。

そうそう。戦争犯罪人として受け渡されたアズラエルは懲役240年の禁固刑、 Rond 兄弟は軍法に基づき処刑、ナタル・バジールやアーノルド・ノイマンをはじめとする〈ドミニオン〉クルーは情状酌量が認められて現在はオーブ宇宙軍に所属している。なお、ナタルとアーノルドは来年にも結婚しそうだ。というのはマリユーの妊娠が発覚して浮かれまくりだったムウ・ラミアス一佐の無駄情報だ。

——あんたもそろそろ結婚したらどうだ？

——誰とだよ。

——はあ？ セイラ・アブナズルっていういい女がいるだろうが。

という話をしたのは2週間前のことだ。

ああ、そうだよ。

どうせ俺は一人上手だよ！

「AL展開、惑星間航行強度まであと40……10……惑星間航行強度まで到達」

「つていうかき、セイラ」

「なに？」

「別に口頭でやる必要、ないだろ」

「気分よ、気分」

〈アークエンジェル〉の艦橋には俺とセイラしかいない。他の同行メンバーは全員コロニー側の管制室に集まっている。そちらには別口で状況報告の放送を行っているので、いちいち艦橋であーだこーだする必要は皆無なわけで……

へあきらめろよ、本体。どうせ俺たちはひとり上手なんだから」

居残り組のシャア・アプナズルがそう念話で告げてくる。もつとも、向こうは「ドミニオン」を用い、同じように来週には旅立ってくる予定だ。あとは木星で大気資源採取施設を完成させ、帰還用の「ジェネシス」を組み立て、ついでにM粒子型核反応炉を完成させ、地球⇄木星往復資源船を就航させて……やること、いろいろあるなあ。おい。

「どうしてこうなった」

俺は未完成だった「アストレイ」に乗りたかっただけなんだがなあ。気がつけば、これだ。

だが地球圏に残ると、もっと面倒なことに巻き込まれるのは必至。さらなる研究を進める意味でも木星圏くらい遠くまで移動したほうがいいに決まっている。

「いつそ別人になるか……」

ヒトの知り得る全ての知識を脳内で検索できる「超叡智」を使えば、人為的に転生する手段も……ほら、あった。

「今度はもう少し、のんびり生きられる立場になりたいもんだわ」

出発のカウントダウンが始まる。

さて。まずは木星だ。

種死がどうなるのか謎な部分が多々あるが、そんなもん、知ったことか。そもそも「超叡智」があれば木星圏に地球以上に豊かな文明圏を築くことも可能だ。あとはもう、ここで生きている連中で好きにしてくれ。

よって！ 俺の頑種はここで終了！ そうする！ そう決めた！

あとはほんと、好きにしてくれ!!

>>>SIDE END

>>>SIDE OTHER

……その後、地球圏で案の定、大規模な戦いが起きた。コーディネイター至上主義過激派によるユニウスセブンの残骸を地球に落とす

という「ユニウスセブン落下テロ事件」、通称「ブレイク・ザ・ワールド」を発端とした地球連合とプラントの第二次戦役だ。これはロゴスとターミナルの暗躍により戦火が広げられ、原作の種死のような様相を呈するが、原作そのままとは言えない部分が多々あった。

なにしろムウはオーブで二児のパパになっている。

エクステッドはジョン・ドウ暴露事件時に救助されている。

キラはフレイと結婚、医師の道を志すようになり、軍から遠いところにいる。というかブレイク・ザ・ワールドの時点で三児のパパだった。さすがスーパーコーディネーター。下半身もSEEDだZE☆

カガリはウズミの引退に伴いアスハ家首長およびオーブ代表首長に就任するものの、原作とは遠く離れた、オーブのためなら他国民の虐殺にも目を閉じるような逞しい(?)女傑へと成長しつつある。また、ものすごい斜め上な展開の結果、なんと『ASTRAY』シリーズに登場したユーラシア連邦軍特務部隊『X』のカナード・パルスと恋仲になっている。

なお、カナード・パルスはオーブでキラと運命的な遭遇を果たし、ナーヴギア用コンテンツのひとつであるロボットバトルゲーム『デンジャープラネット』で雌雄を決し、いろいろと心の整理をつけたらしい。というか、それでいいんだ。すげーな、VR。

シン・アスカはオーブの教育機関に在学中。

ギルバート・デユランダルは、ラクス政権を支えるターミナルの謀略により開戦前の時点ですでに失脚。シングルマザーになっていたタリア・グラデイスはその子供、さらに保護下にあるレイ・ザ・バレルと共にオーブに亡命。本土で遺伝子調査会社を立ち上げ、新たな人生を始めているところだ。

なお、レイ・ザ・バレルはちよつと可哀想だったので、こつそり俺が拉致してテロメアの問題を治してある。そのせいでひと騒ぎ起きたのだが、「人類の技術はまだ遺伝子の全てを解き明かしたわけではない」という結論になった。というか、そうなるように世論誘導した。だからレイ・ザ・バレル、おまえは幸せになっていい。俺が許す！

んっ？ ミーア・キャンベル？

売れないでないけど月面で知る人ぞ知る歌手として活動しているが、何か？

一方、ラクスは彼女の相談役となったマルキオ導師のせいで、世界征服すれば世界平和が実現できる”などと本気で考えるかわいそうな状況に。アスランはマルキオ導師に反発しつつも、自分では決断できないうところが何も変わっていないので状況に流されまくり。

〈ミネルヴァ〉はアンドリユー・バルトフェルドが艦長に抜擢。アスランの相棒扱いを受け続けているニコルの部下にルナマリア・ホークが配属。〈インパルス〉はアスラン、〈セイバー〉はニコルの乗機となった以上、主人公はアスランってことか？ いや、種死の主人公は”主人公（涙）”だからなあ……

ロード・ジブリールは平常運転。こいつは原作そのままと言っても良い。

最終的にオーブのみが平穏を享受。オペレーション・ラグナロクごとへブンズベース攻防戦の後、逃げ出したロード・ジブリールがオーブに逃げ込むが、難癖をつけているとしかいえないオペレーション・フューリーは俺の置き土産というべきオーブ軍の〈ウインダム〉の大活躍でオーブ圧勝。多大な権益をロード・ジブリールから引き出したうえで、彼を宇宙に放逐する。

で、あれこれあったあと。

メサイヤは離反したアスランが破壊。マルキオ導師を殺し、ラクスと共に爆発の中で消え、ルナマリアは涙するニコルを抱きしめてエンディング、という形でユニウス戦役は幕を下ろすことになった。

原作の主要人物を欠いたことで二流がgdgd(グダグダ)してばかりの展開だったが、総じて俺の肩入れしたオーブが利益を受けた点だけは確かである。

そんな俺、ユウナ・ロマ・セイランはCE99年7月10日、木星共和国の建国宣言が行われる一年前に48歳の若さで逝去している。死因は宇宙白血病。遺体は生前の本人の希望で木星葬——木星大気圏下に落とす——に伏された。

……ということになっているのだが。

「はあ、今日もいい天気だなあ」

地球の南半球、オーブにもほど近いポリネシア諸島の某島。某龍玉のタートルな仙人の家には見ええないものが建っている孤島の砂浜では、パラソルの下でのんびりとロングチェアに腰かけている俺がいたりする。

うん。生きてるんだ。俺。ちなみに転生もしてないよ？

ただ、顔立ちや体型は随分変わったと思う。

髪の色は青みが強まり、紫色っぽい感じになってきたし、頬骨が自然と削れたかのような感じで顔全体がシャープにもなっている。整形したつもりはないんだが、今にして思うと転生前の名前がフラグそのものだったじゃないかなあと思うところが少々。

あー、みなさん、どうも。白川修造（しらかわ・しゅうぞう）です。

うん。あれだ。『スパロボ』シリーズのテラ子安のひとり、たまにしか出てこず、出てきたら謎めいた事を言い、おいしい所を持つてくだけ持つていつて帰る”のが特徴の、超絶的な自信家にして自由を熱愛する御方であえせられる超天才、シュウ・シラカワ博士。その影響を、俺、色濃く受けているらしい。

そりゃあ、【超才能】に【超叡智】なんだもんな。逆に納得したよ。俺、無限に存在するシュウ・シラカワの並行存在のひとりなんだって。そのわりに前世、平成日本での俺は、大したことはないプチオタクなだけだったか……

なんにせよ。

いろいろあって不老長寿になった結果が、今の俺だ。シュウ・シラカワ本人ほど目つきは鋭くないし、どちらかといえばボケくツとした感じがするシュウ・シラカワ（笑）な感じだが、今は地図にも無ければ認識阻害により間接的な記録上でも存在を把握できないこの島で興味の赴くままに研究三昧の日々をすごしている。

「ふむ……平和ですか。そうですか」

自分勝手な転生者は、贅沢なひとりの時間を楽しみ続けるのだった。

\\SIDE END

\\おわり